
雪の中からこんにちは、飼い主さん！

ものもらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の中からこんにちは、飼い主さん！

【Zコード】

Z9129Z

【作者名】

ものもらこ

【あらすじ】

凍土にて、ウルクスヌの亞種なのか一匹だけ黒い兎がありまして、大きいし色は違うしひジタリアンのくせに強いしで、同族から嫌われてハブられていきました。

しうがなく兎はただ一匹、日々を寂しく過ごしてきたのですがある日、通りすがりの人間と遊んでみようと思いました。

勿論、当然ですがギルドから危険視され、討伐クエストが出されるわけで……凶悪な兎を退治しにきたハンターさんが、やって来てしまったのです。

ですが色々あつてそのハンターさんに懐いてしまった兔、遊んでくれるハンターさんとずっと一緒にいたくて、『凄い人』に頼んで人間になれる山菜を貰い、ハンターさんの前で食べてしまいました。すると巨大な黒兎は一人のほつそりとした女の子になってしまったのです！

……これは懐かれたハンターさんこと『飼い主さん』と元兎少女の、のんびりふわふわバケツをブン投げたくなるような、恋のお話。モンハンを最後まで終えて無い + 設定もうろ覚えなのでかなりおかしい部分がありますので、ご注意ください。

1・初めて、元兎のハンターです

雪の中からこひんこひは。お元氣ですか？

ねえねえ、お元氣ですか？ねえねえ。…と私は一生懸命跳ねてみるのですが、『飼い主さん』はまったく反応してくれません。折角温かいテントから抜け出して雪の中に潜り込んで飛び出してみたのに。飼い主さん酷いです。

え、『飼い主』って？

…ふふふ、この人は私の飼い主なのです。何故なら私は兎。元兎の現人間ですから。

私は真っ白な雪兎の中で、ただ一匹だけ黒くて 皆によくもきゅもきゅされましたのもきゅもきゅし返したら、何故か皆、私に構つてくれなくなりました。

寂しくて雪の中に埋もれてたり、雪玉を作つては通り過ぎる人間に見せたりしたのです。構つて欲しくて猫パンチならぬ兎パンチもしました。そしたらやつぱり皆逃げちゃつて、一人しょんぼりしてたら飼い主さんが來たのでした。

私は同族と同じ匂いのする飼い主さんに喜んで飛びきました。ぐ

るぐるしました。鬼パンチしてみました。そしたら雪の山に埋もれてしまったので、一生懸命引っ張り出しました。

でも何故だか飼い主さんは起きないし震えているので、くつこで温めてあげました。

その間、蜥蜴さんが興味深そうにこちらを見てたのですが、私と田が合つと何処かに行っちゃって。寂しくてそのままお昼寝することにしたのです。

うとうとしていたら不意に飼い主さんがもぞもぞ動きだしたので、私も目を覚ました訳ですが……何故か飼い主さん、「ゴロゴロ転がっていました。

私も真似で「ゴロゴロしたら飼い主さんに蹴られてしまい……多分その時の私は（＼＼＼＼＼）って顔してたと思います。飼い主さんも似たような顔をしてました。

それから飼い主さんはゆっくり手を伸ばして、もしゃもしゃしてくれたので鼻先を押し付けてみました。ああそれで…鬚を、引っ張られました…。

でも、仲良くなれ合つたのに、飼い主さんは何処かに行つてしまつたのです。

私は寂しくて寂しくて、ずっとそこで丸まつてました。そしたら陽が昇つた頃に飼い主さんがまた来てくれて、お肉を寄こしてきましたが私はベジタリアンなので拒否しました。そしたら今度は飼い主さんが（＼＼＼＼＼）って顔をして、それを見た私も似たような顔

をしたと思います。

次の日も次の日も来てくれたのですけど、やつぱり帰つちやう飼い主さんが恋しくて、雪山の凄い人に聞いてみたんです。会いたいよーって。

凄い人は「お前は人を見るともきゅもきゅしちゃうから人里には行つちゃ駄目なんだ」って言われました。人間は弱くて、もきゅもきゅすると死んでしまう。そうすると怖い人に滅多刺しにされて、飼い主さんに悲しい思いをさせるんだよ、とも言われました。

じゃあ私はずっと独りぼっちなの?って聞いたら、凄い人はうーんって悩んだ後、小さな声で教えてくれました。

「一つだけ、方法があるけど、そしたら君はもう戻れないし、自分の身も十分に守れなくなるんだよ。それでもいいかい?」

私は当然頷きました。

何かあっても何とかなるだろ精神で生きてきましたから、あんまり深く考えなかつたのです。

凄い人は不思議な山菜を渡すと、飼い主さんの前で食べなさいとだけ言いました。き、き、きせいじじつ?…を作ればイケると言つていました。

それで今度は美味しい葉っぱを持って来てくれた飼い主さんが

遠くに見えた瞬間にやせつとぺろつと食べて、飼い主さんが寄つてくる頃にはもう、ふるふる震えました。

飼い主さん…すいへキョドつてました。雪を孕んだ風に一瞬視界が閉ざされた後、すいへく寒かつたのを覚えています。耳が痛かったのも覚えています。

飼い主さんは何も言わないで私を見てまして、ややあつてから私は剥がれた（？）毛皮をしつかり着せて手を引いてくれたのですよ。その後色々あつたけど、飼い主さんは飼い主さんになつてくれました。そつけないけど心の広い人なのです！

だから今だつてそつけなく掘り続けるけど、あと一分したら私の好物の林檎をくれるつて分かつてます。

そのまま黙つて林檎を齧つてたら、最初に言いつけられた テントに戻つて火の番をしてると頼んでくるのです。私が火の番をしながら寝てる頃には帰つて来て、また林檎をくれるのです。偶に毎もあるので、わくわくしちゃいます。

「ほら」

「……」

でも、本当に偶に、意地悪をしてくるのです。
田の前に転がつてゐる肉。機嫌が悪いとこれを投げてきます。そういう田は黙つていなくなつて心配かけてやるのです。

私は震えていた猫を一匹掴んで、兎の頃よく昇つてた場所に腰掛けます。暇だったので雪玉を作つてみました。：兎の頃と違つて、当時の雪玉作るのはひょりと時間が必要なのです。

そしてやつと出来た雪玉！これを 飼い主さんの出口近くに落として氣を引くのですよふふふ。よいしょ、よいしょ、てい。

「さ」

「！」

「ちよ、」

えっへん。と胸を張る下で、何かの鳴き声と隣から猫の「ちよ、」が聞こえましたが無視です。一個田を作りましょう 投下！

今度は何の声も聞こえません。猫は毛を逆立てて丸まっています。私は緊張している猫を撫でると、遙か下から飼い主さんが私を呼ぶ声が聞こえました。

「 黒おおおおおーー降りて来いつお前はなんて狩りをしているんだーー。」

…………狩り、って。何の事でしょ？

*

「(イ)注文は?」

「肉」

「葉っぱー!」

「え……」

「…… サンドイッチで」

普段はあまり買つてくれないので……生活が苦しいのかなと思つて
あの後、飼い主さんが見事仕留めた…えーっと、何とかを売つたり
したら余裕が出たので、飼い主さんが何か買つてもいいよって言つ
てくれました。

私は家計簿をつけてる飼い主さんの膝を枕にして火に当たる時間が
好きです。偶に大人しくしてると一三回頭を撫でてくれるのですよ。
もの。

あ、葉っぱと何かが来ました。美味しそうです。

私は家計簿をつけてる飼い主さんの膝を枕にして火に当たる時間が
好きです。偶に大人しくしてると一三回頭を撫でてくれるのですよ。

「……」

「……おい、サンドイッチを早々に分解するな」

「だつて、お肉が……」

「食えよ、それぐらい」

「……」

「いただきます、ひとつ」

「……」

「……」

「……」

「……ぐすん」

「……～～っ、一口食えよっ 一口ー。」

そう言われて突っ込まれたのは飼い主さんの油たっぷりのお肉でした。戾しそうですが飼い主さんの手に塞がれて戻せません。しょうがないので飲み込みました。

「つたく…ほら、取つてやつたわ」
「葉っぱー！」

口直しに食べる葉っぱはとても美味しいです。飼い主さんが淡々と口に入れてるお肉よりも美味しいのです。
でも飼い主さんも兎仲間も、お肉が一番美味しいと言います……葉っぱしか食べない私を変な物でも見るよう』……あ、飼い主さんは「栄養がー」とか「もつと太れー」とか言つてくるのですが。

「……美味しい、です」

「あ？…ああ」

「…あの、美味しい、んですよ」

「……そつか」

「（、・・・）」

「察しる。家ならまだしも店では駄目だ」

さつき、飼い主さんは私に分けてくれたのに。なんで私は駄目なんですか。

ずっと（、・・・）な顔をしていたら、飼い主さんは特別に甘いものを頼んでくれました。

……えへへ、とても美味しいのです。

でも急いで食べないといけません。

飼い主さんが言うには、これからこの街では花火が上がるやつなのです

私は急な音や大きな音が苦手なので、そういう音を聞くと固まってしまいます。だから私を遊びに連れてってくれる場所は静かな所が多いのです。

今日は飼い主さんの用事は無いので、居られる限りは私に付き合つてくれるやうですから、私が早くぺろつと食べちゃうのは全然変じやないのでですよ。だから飼い主さん、そんな田で私を見ないで下さい。

私は飼い主さんに口を拭く様に言われたので「シゴシ拭いて」と、会計を済ませた飼い主さんに促されて店を出ました。

あまり人のいない所なのはぐれる事はないのですけど、飼い主さんはちやんと服を掘ませてくれるので。

「何が欲しい？」

「葉っぱ…」

「さつも食つただろうが」

じゃあ林檎なら良かつたんでしょうか…飼い主さんは小物とかを勧めてきますが、食欲の前にはまつたく……あ、

「えいりえいり？」

「あー？…ああ、飾り物屋か」

「……？」

「…まあ、お前も女だしな。折角だし買ってやる。何が良い？」

「林檎がいいです」

「……うん、俺が選ぶわ」

駄目出しちゃかりなのです…。

だけどあれはビリとかこればビリとか聞いてくる飼い主さんの駄目出しが嫌いじやありません。

大きな手が小さな髪飾りを摘まみ上げるのをじっと見ながら、それるがままになつてゐるのも、嫌じやあつませんよ。

服もですが、誰かにあげよつとしてつだうだしての姿を見るのも楽しいのです　　あれれ、今回は早く決まりちゃいました。

飼い主さんも値切らずこのまま買い付けると、私の髪にそつと差してくれました。

それは青い硝子の髪飾りで、頭を動かすとしゃりしゃり音を鳴らします……ちょっと、不快。

でも飼い主さんが小さく「まあまあだな」と言ってくれたので、頑張って慣れます。頑張って……うーん。

「……どうした?」

「あ……あり、がとう、『これこます

「いや……

じゃあ、次行くぞ、と頭をわしゃわしゃしてくれた時に鳴った髪飾りの音は、不快じゃあつませんでした。

*

無口だけど面倒見のいいハンターさん×悪戯好きの鬼少女

1・初めてまして、元兎のハンターです（後書き）

オマケ（キャラクター紹介）

* 兎少女 名前は「夜^{ヨル}」真っ黒な髪の女の子。力持ち過ぎてヤバイ。
悪意の無い、本当に悪意のない悪戯にトラブルを起こす兎さん。
ウルクスス
兎時代の名残は髪以外に無い。兎耳を期待した人は「ごめんなさい」。
雪ん子なので肌は白いしひジタリアンだから細い。

装備はウルクススだつた自分の毛皮で出来た装備。装備屋の店主が
夜に合わせて作ったので、オリジナル装備なのかな。ちなみに毛
は黒つて表記したけどチョコレートを黒くした感じ。

* 飼い主さん 名前は「咲^{サク}」二人合わせて咲夜さん！…というのは
置いといて、薄茶（セピアゴールドの安っぽい感じ？の色で）の髪
の青年で、家計簿をつけたりする家庭的なハンターさん。林檎の兎
をよく作ってくれるよ！

夜のことは兎時代に「黒」って呼んで可愛がつてた（実は小動物大
好き。夜は大きいけど動きが小動物過ぎて可愛かった）その名残。
「飼い主さん」呼ばわりは非常にヤバい、明らかに変な性癖の人と
見られかねないので、公の場では「咲」と呼ばせてる。

* 本当は竜にしようかな、って思つたんですがちょうど雪の時期
兎！に。

いとう／かなこさんの「と・あ・る・竜・の恋・の・歌」を聞いて
たら人外×男で何か書きたかったのが始まりです。

とても壮大で美しい歌ですが、本作は壮大さ皆無でござります…。

2・得意な武器はハンマーなのです

お布団の中からぬまよひざをます、飼い主をさ。

私は放すものかと布団をしつかり握りながら、朝ご飯の香りがする飼い主さんにいました。

……でも私の必死の抵抗虚しく、飼い主さんは容赦なく私から布団を奪うのです……そして首根っこを掴んで猫達の待つ厨房に連れていかれました。

私としてはまだ丸まつていたいのですけど、「ご飯の匂いを嗅いだらやる気が起きました。飼い主さんの隣に座つて、一緒に「いただきます」って言つて、葉っぱが巻かれた分厚いのが数個浮かんでいるスープに手を付けます。

「む…………ううううう…………！」

「おい、俺の隣で吐いたらお前もコレみたいに巻いてスープにするぞ」

「…………うそつき…………」

「俺が一体なんの嘘をついたんだ

酷い酷い酷い！葉っぱの中にお肉が入ってるだなんて酷い！

飼い主さんは朝から意地悪だ。残したらきつと怒つて無理矢理口に入れさせるし、吐いたら無言で責めるだらうし。でも食べたくないし…。

「　　いいか、これはお前の為なんだ。ただでさえ棒みたいなのがお前…そのままだと血が作れなくなつて倒れんぞ」

「…………」

「これでも肉を少なめにしたんだ。葉っぱの裏に芋虫が付いてると思つて食べば別に抵抗ないだろ」

「　　あ、そつか」

「…………否定しろよ…………！」

飼い主さんは頭を抱えて「元は鬼だしな…」とか「いや、でも女として芋虫が付いてる葉っぱを食つても平氣、つて考えは…」とかぶつぶつ言つてるのを見てたら、猫達がテーブルの下から「一氣…一氣…」と離したてます…「うーん。

「…………もむつ」

「…………！」

「む…………うう…」

「…………食いながら呻くなよ…」

「ん…………芋虫食べましたっ」

「これは芋虫じゃねーよ…」

「む…………！」

「一つの意味で突つ込まれました。
もつお腹いっぱいです…食べたくないです…でも飼い主さん怒つて
るし…」

「よしつ飲み込んだな…？」

「…………」「ククク

「これで最後の一個だ。」これが食えたらそこは新鮮野菜サラダ食つ

ていいぞ」

「…………あ

「ああん?」

「（・・・・・）」

あーん、って。さつきみたいにして欲しかつただけなの……ぐす
ん。

*

「…………（・・・・・）」

「　　おーい、そんな顔してんな。採集クエスト行つてくるだけだ
る。むしろ下級クエストにお前の敵はいないだり」

「…………（・・・・・）」

「だからそんな顔……しうがないだろつ俺は今日はびじりしても付
き合えないんだつ船に乗んないといけなくてだなつ」

「…………（・・・・・）」

「お前には向いてないクエストなんだ。ほらつ今日は『』の練習しこ
行くつて約束したんだろ。遅刻は駄目だ、早く行きなさい」

「…………」

「……………着いた、な」

【集会浴場】

飼い主さん……Hプロン外すの忘れてます……（、；；；）

「旦那さん、砥石忘れてる」やー
「あ、そうか……」
「旦那さん、それはただの石こーー」
「……………」

黙つて泣かれるのが苦手な飼い主さん。焦り過ぎて刀じゃなくて包丁を持つてるのですが……ちなみに待つてる間も泣いてました。だつて飼い主さん、今日は夜遅くに帰つてくるのです……一人ぼっちです……。

「……………送りぐらには行つてやるから。待つてん」

「……………（、；；；）」

「……………あれだ、変な人に付いてつたら駄目だぞ……」

「……………（、；；；）」

「… そうだな、黒が採集頑張つたら美味しいもの作れるかもしねえな」

「本当ですか！？」

「…………お前って、食欲が満たされればなんでもいいんだな…」

ほら、クエスト頼んでこい。と飼い主さんに受付まで連れて来られたのですが、にこにこ笑ってる受付嬢さんは最近来られた人間なので、慣れてなくて…結局、飼い主さんが受付を済ませてくれました。

飼い主さんは早く自立しろと言います。でもそういう割には甘かったり面倒を見てくれます。だけど意地悪で…複雑な人間です。

なんでも飼い主さん曰く、人間というのは面倒くさいモノなのだそで、私は子供だから分かつていいだけなのだそうです。それはとても…外見年齢と精神年齢が釣り合つてない私には危ない（何故か知りませんが）事らしいので、私の人間関係には基本的に飼い主さんが間に入ります。

なので向こうからやつて来るお一人も、当然ながら飼い主さんのお友達ですよ。

「夜ちゃん！お待たせー！」

「…？咲、お前なんでこんな早く…？」

「ふふふ、聞いたや駄目だよスワイーツ！咲ちゃんは心配性で小さい子大好きな人なんだから」

「…………」

「チヒダ…此処で刺身みたいに捌いてやつてもいいんだぞ…？」
「やーん怖い！助けてスウェーツー！ロココンが襲つてくるー！」
「！」

「あ、ーー待つた、「」めん、悪かつたから、落ち着け咲。こいつは
じつこう風にしかスキンシップとれないんだ」

一人の間にスウェーツさんが割つて入ると、飼い主さんは怖い顔で
チヒダさんを見た後、飼い主さんの背中に隠れていた私を引っ張
り出しました。

「？」

「いいか黒、絶対にこのアマの言つ事する事は真似するなッ！」の使
い方だけ学んで来い！」

「あ

20

言つだけ言つと、飼い主さんは背を向けて何処かに行つてしまいま
す。

そうすると私は急に心許無くなつて、慌てて飼い主さんの装備の端
っこを掴みました。

「ま、待つて下さい。見送つてくれないのでですか…？」

「……俺は送りだけつて言つたら」

「あつ…か、飼い主さん…」

「飼い主さんはやめらつて

「……（ 、 ； 、 ）」

「泣くなよー！」

「……（ 、 ； 、 ）」

すると後ろから女の子泣かしたー！という声が聞こえ、周辺の人は泣いてる私を見てヒソヒソ囁き合つてます。

飼い主さんはごじごし大きな手で涙を拭うと、強く私を引っ張つてお二人の元に連れて行つてくれました。

飼い主さんがチヨタ－さんと無言で見つめ合っている間にスウェーツさんが手続きを全て終わらしてくれたので、……ついに飼い主さんとのお別れが…（・；・；・）

「いいか、二人に迷惑かけんじゃねーぞ。転んで怪我したら、回復薬飲んですぐに傷口を綺麗な水で洗つて大人しくするんだ」

水か無かってたゞ?

回復薬でもたけて

お祭りで、お餅を食べたり、お酒を飲んだり。

卷之三

お気をつけてと言つておきながら飼い主さんの装備を离せないでいる私の肩に、飼い主さんの大きな手が乗せられました。

「俺のいない間、留守を頼むぞ」

二〇

「…まあ、そんなに家を開けないけどな。夕方から夜までの間、俺の代わりに頑張れよ」

私は声に出せない代わりに静かに頷いて、そろそろと飼い主さんの

装備から手を離します。

すると飼い主さんは「シヨボくれてんじやねーぞ！」と背中を一回叩くと、未練がましく何度も振り返りながらクエストに向かう私を、ずっと見送ってくれました。

*

チエダーさんは銀の髪が美しい、上級ハンターさんです。遠距離の武器しか使えないそうですが、凄い実力の方で飼い主さんも舌打ちしながら認める程の腕前なのです。

装備もとても綺麗な虫さん装備。スウェイーツさんとお揃いで、頭の装備も一緒が良いからとカチューシャではなく帽子。紫の色がとてもお似合いなのですよ。

スウェイーツさんは濃い茶の髪で、青みがかつた銀色の瞳。この前上級ハンターさんになられたそうです。

何だかんだで押しに弱いとか騙されやすいとかお一人（飼い主さんとチエダーさん）から聞いています。それと会つ度にお菓子をくれたりするので、私は大好きなのです。

「　　はーい、もっと弦を引っ張つてー…もう少しあい、もう少しそうと頑張つてー…はい、パーン！」

「…あひ」

お一人は飼い主さんの狩り友で親友（飼い主さんは否定していませんが）のよしみで、主にハンマーを振り回すぐらいにしか能の無い私に根気良くなき合つてくれます。

チエダーさんは普段は子供のように無邪気な人ですが、今のようにご教授くださる時は飼い主さんと似たような雰囲気になります。

私に食事の仕方を教えてくれた時のような…ですかね。

ですが折角チエダーさんが手を添えて下さった私の矢は、何故か途中で落つこちて跳ねて転がります。

「うーん、最後力が抜けちゃつたからかな」

「……はい」

「夜ちゃん力持ちだもんねー、下手に力入れちゃうと矢がボキン、

だし」

「私に…弓は向いてないんでしょーうか…」

「んん、まだ分からないよ？力の加減が分かればいい訳だし…狙いはそんなに悪くなかったと思つんだよねえ」

私が転がつた矢を拾い上げてもう一度構えてさつきよりは強めの力

で射ると、今度は木に刺さつたものの ポテ、と矢が抜け落ちました。

「……（、・・・）」

「うーん、これはこれで才能があるとこつか 」

そう言つて引き抜くと、チョダーサンは自分の弓をぱちっと取り出して矢を引っ張ります。

目は細められていて、形の良い唇はにやりと歪んでいて、渴いたのか舌で濡らせた瞬間 鳥さんのお尻に射ました。

吃驚した鳥さんが産んだ大きな卵。凄い凄いと跳ねる私に「でしょっ？」と笑いかけると、『』を仕舞い込んで卵を拾い上げました。

「じゃ、ボックスの所までの護衛、よろしくね？」

「私…が、頑張ります！」

「よしよし、やる気があるのは良い事だぞー」

まあそういう意気込んでも、此処は比較的穏やかな子ばかりだから、下手な事しなければいいだけなんですね…。

一応片手にしつかりと握っている弓をバタンバタン弄りながら、鼻歌交じりに隣を歩くチョダーサンとおしゃべりしてもいいでしょうか…。

「あの、チョダーサン」

「ん？」

「飼い主さんは…今日は何のクリストに行かれるのですか…？」

飼い主さんはたくさんの人前では咲と呼べと言いますが、チエダーさんとスウェーツさん、村長様の前ではそう呼んでも怒られません。いや、嫌そうな顔はするんですがね。

何でも、飼い主さんが「もしも」の時の為の保険だと、私の正体を信頼できる方にだけ教えていたのです。その「もしも」は何かと聞くと、飼い主さんは答えてくれないのですが。

「あー、確か砂漠だつたかな。何か珍しいのが来てるから、船で追つて仕留めるんだよ」

「砂漠で舟…ですか？」

「そ…実は私、熱いのが苦手で…そのモンスター倒した事ないんだよね」

「私も砂漠は嫌いです」

「まったくだよ。クーラー十本飲んでてもフラフラだね」

「それはドリンクのせいじゃ？」

「スウェーツもそう言つてきてね、『いいや、君のせいだよ』って耳元で囁いたら顔真っ赤にして口に躊躇ついてやんの一…もつと弄つてやろうと思つたらボスが来ちゃつたんだけどさ、スウェーツは使い物になんないし、結局私が仕留めたわけ」

「チエダーさんはいじめっ子?」

「愛のあるいじめっ子だよ!」

夜ちゃんも咲ちゃんにやつてみなよ、きっと反応に困つて何やらかすか見物だから… と大変イイ笑顔で勧められたので、いつかやってみたいと思います。「面白そうです」と私が笑うと、チエダ

—さんは懐かしむような顔で私をまじまじと見ました。

「どうしました?」

「んん、いやね、故郷の妹に似てるなあと思つて」

「妹さんも髪が黒いのですか?」

「私と同じだよ。どうじやなくてな うん、子供みたいに笑う所が似てるんだううね」

「子供…」

「わ。見ててこっちがふわふわしてくる感じ。……いーなー、こんな子と寝食共にしてたら幸せだわー、癒されるわー。……あのロリコンが羨ましい…」

「ずっと思つてたのですが…その『ロリコン』って何ですか?」

「ロリコンはねー、小さい女の子が大好きな変態の事だよ。夜ちゃんは外見は1~8ぐらいに見えても、中はまだまだ小さな子だからね、あの変態はそのギャップに

「ひや

がしゃん、とチエダーさんが両腕に抱いていた卵を落としそうになつて必死に抱き直し、私が急いで弓を構えた先には、襲ってきた青い熊さんを追い払っていたスワイーツさんが濡れた手でチエダーさんにてロリンしていました。

どうやら言葉を遮ろうと後ろから近寄つて首筋に冷えた手を当てるようでした。

「お前な、夜に変な事を教えてんじゃねーよ

「教えてないですー、聞かれたから答えたんですよー」

「お前が聞くよに仕向けてんだろうがつ

「

夜も今のは忘れとけよ、と肩に蜂蜜がまだ少しびり付いているス
ウェイーツさんに頷こうとしたら、チエダ－さんが「スwwウェイ－
wツの、肩ww蜂蜜www」と笑つた事に怒つてしまつてそれどこ
ろでは無くなりました。

「何? 蜂蜜でも投げられちゃつたの? 上級wwwハンターなのにwww
w」

「うぬせーーペイントボールが急カーブして当たらなくてな…もた
ついてたら蜂蜜が」

「ペイントボールは急カーブする機能が付いてるんですか?」

「急カーブする機能wwwとかwwwスウェイツのペイントボールって
最先端www」

「うつせこよ!」

ひとしきり笑つた後、急いで卵を置いて青い熊さんを頭で倒しに行
く事にしました。

これも練習だと、私が射るのを一人が見守りつつサポート、って感
じでしたが。

何故か戦闘場所はペイントボールが転がつていてあつちこちに中身
が飛び散つていて、チエダ－さんがお腹を抱えて笑つたのには熊さ
んも吃驚していました。

育児もこなすハンターさん + 世間知らずな兔ちゃん + いじめっ子ハンターさん + 出番の少ない格好のつかないハンターさん

2・得意な武器はハンマーなのですよ（後書き）

オマケ（キャラクター紹介）

* チェダーさん

私がプレイした時のキャラクター名です。「チェダー先輩」って登録してました（笑）可愛い装備しか着せませんよ！

ユクモ村の中では射撃の腕前はピカイチ設定。だって基本的に今回出てきた人しかいないからね！他のハンターさんは旅の途中寄つて来た人とか療養してリハビリ目的でとかで、四人以外誰も集会浴場に来ない時があるというマイ設定です。

ガンナーでもバリバリ前線に出てきたり何だりとアクロバティックな射撃をする子ですが、狙いは常に良いという…。いじめっ子ではありますか弟妹の面倒をみてきたせいか年下の面倒を見るのが好き。自分の面倒もみて欲しいけどね！

何だからいい子だから、咲はからかわれても信頼しちゃうのでしょう。

* スワイーツ君

私がプレイし（ry

装備はチェダーと同じ虫装備。シルクハット被つてますが何か？双剣ハンターで、好きな武器は狩団子。だってスワイーツだからね。猫達の名前もスワイーツな感じ。チェダーさんはチーズ関係の名前とか付けてる。

ちなみにチェダーさんとの出会いはジンオウガに襲われてユクモ村に向かう道を転がり落ちた先で、精算アイテムの茸とかタケノコを焼いて食べようとしてるチェダーさんに介抱してもらつた。

チエダ－さんは一応年上で先輩なんだけど、色々酷過ぎて敬えない。でもちよつかいかけてくれるチエダ－さんに懐いていて、何かとチエダ－さん家に遊びに行つてゐる。村の人間からはさつとくつつけよリア充とか思はれてる。

*「一人共名字を名乗つてて、お互いはお互いの名前を知つてゐる。咲君も知つてるけど、スウェーツ君が自分の名前が可愛過ぎて死ねる位名前を呼ばれるのが嫌なのを知つてるので呼ばない。チエダ－さんはどうでもいい時に呼んだりする。最近はチエダ－さんに呼ばれても恥ずかしがらくなつてきて、咲君にさつさとくつつけよう（ゝゝ）と思はれてる。

チエダ－さんは何となく言わないだけ。聞かれたら多分名乗る感じ。ただ性格に合わない綺麗過ぎる名前なので咲君が呼びたくないだけ。周りはそんな咲君のせいでスウェーツ君と同じく自分の名前嫌いのかなつて思つて名字呼びしてゐる。

咲君曰く、チエダ－さんの親以上にチエダ－さんはネーミングセンスが無い。

3・好物は林檎、林檎の鬼なのです

たん、たん、たん、たん、たたん、たたたたたつ

「あ、咲お前、こんな所にいたのかよ」

「…どうした、アレがやつと出てきたのか？」

「いや、…なんだ、お前の姿が見えなかつたもんだから、不安です
つと　え、ちょっと引くなよ！？」

「だつてお前の噂が…」

「違うから、本当に違うから。アレは婚約者が…浮氣防止用つて…！」

「おい、泣くなよ」

たん、たん、たん、…

「…」

「なんだよ」

「…いやね、何でいうか…お前、雰囲気柔らかくなつたよな
「そうか？」

「さつきの昼飯の時にボケーと林檎を兎ちゃんにした時とかな。
ハンター成りたての頃にリオレウスとばつたり遭遇した時の衝
撃が走つたわ」

「あれはいつもの癖だつたんだよ…恥ずかしくて死にそうだから暫
く皆の所には行かねー」

「引き籠んなよ…」

たたた、たん、たと、たん……、

「つーかあの林檎、癖だつて言つてたけどさ、何？お前ン家に子供ガキでも居んの？」

「ああ……預かつてるつていうか引き取つたつていうか」

「どつちだよ」

「村長が俺に頼んで来て……孤児（？）だつたのを俺が拾つたのが始まりだつたんだが」

「へー、女の子？男の子？」

「女」

「おー、いーねー、……手は出すなよ？」

「出さねーよ！」

「分かつてるつて、冗談だつてえ。……で、どんな感じ？美人になりそう？性格とかは？」

「……多分美人……？性格が……何て言つかな、野性児にならないだけ有難いんだろうが……世間知らずだな」

「お、おお？」

「どうしても肉が食いたくないみたいで、棒つきれみたいなんだよ」「俺ペチヤ……スレンダーな子もいけるよー！」

「死ね」

「ごめん……」

「たん、たん、たん、

「つーか、さつきから音がするけど、壊れてんじゃないだろ

うな…」

「大丈夫だろ」

「えー…何か聞いてて不安になるから出よつぜー？」

「俺は安心する」

「何で？」

「…あいつが跳ねてる音と、一緒だからな」

たん、たん、たん、

たん、たん、たん、たたた、

*

「一年半、かあ…」

「…? どうかしましたか？」

「いやせ、時間つてこう…早く過ぎていくものだなって

「私は…昔は、長いものだと思つていました」

「そうか？」

「はい。特に…待つてているというのは…長いのです」

「待つって…咲は人を待たせない方だと思うんだけど…」

「ああ、兎だつた頃のお話です。……一緒に遊んでくれる誰かを待ち続けた時は 真っ白な雪の中は、一人で過ごすには寂しすぎます……」

「そう……だな」

「でも、誰かと過ごす雪の中はとても楽しかったです！それを飼い主さんが教えてくれました。今も時々長く感じるけれど、短くも感じじるようになりましたよ」

「そうだな」

「きっと、誰かと騒いで、触れあう時間は、楽しいんだ……」

「でも、お爺さんは楽しくなさそうですね」

此処は渓流、タケノコが生えている長閑な所。

スウェーツさんが採掘を止めて休んでいる隣で、私は採つたばかりのタケノコをポーチの中に詰め込んでいました。

私が声を潜めて呴いたのにスウェーツさんが呆れた視線を向けた先で、チエダーさんはお爺さんの服の胸元を掴んで怒鳴っていました。

「まさか、これだけって訳じゃあ無いでしようねえ、ああん？」

「いや、流石にこれ以上は……儂だって生活かかつてんじゃあつ……」「知るかああーー！か弱い乙女にセクハラしといてタダで帰れると思うなよッさつさと出すモン出せや！」

「ちょっと尻を鷺掴んだだけだろうが……」

「不快なんだよ、棺桶に頭突っ込んだような爺に触られて怒らない

女がいるわけねーだろ、ばああかっ！」

「てめ、ハゲは言つなつてんだろ！……あ、すいません、首縊めないで。痛い、痛いよ、お爺ちゃん死んじゃううう…！」

「もういつそ殺してやるつか、モンスターの巣に放り込んでやるわ
か……！」

ギギギ、と口の端から涎を垂らしながら首をブンブン振るお爺さん。
目が笑っていないチョーダーさん。

んーと、確か陽がまだ真中に行く前の事でしょうか　　お爺さんがチョーダーさんが猫を弄繰り回していた所を狙つて綺麗な装備の下に潜り込んでやらかしたのです。あと

私の胸にも抱きついてきました　…私としても不快だと思いま
すが、もつそこまでにしてあげればいいのではないかと思います…。

スウェーイーさんの双剣でお爺さんの少ない頭髪を剃つただけで十分
大ダメージだと思つのです、そのあとにロー キックも入れてました
しね。

ですがチョーダーさんはこの通り怒りが収まらない様子で、普段の
穏やかな声も言葉遣いも荒々しいのです。スウェーイーさんは見ない
ふりをして採掘した物をポーチに入れていましたが。

「…………おい、チヒダーももういい加減にじとけ」

「はあー…？」

「に、兄ちゃん…懐が深い「死んだら隠蔽するのめんじくせいだろ

う」「えつ

「確かヒョーダー、碧玉と逆鱗が無いって言つてたな……それ、出せよ」

「……えつ？」

「ああ、それいいねえ……夜ちゃん、爺さんの荷物を開けてくれるー？」

「あのつ、飼い主さんが他人の荷物は漁つちやいけないって……」

「大丈夫大丈夫、爺さんの代わりに出すだけだから、漁るわけじゃないよー？」

「そう……ですか。了解しました」

そういうえば私も飼い主さんの代わりに飼い主さんのポーチから道具を出していましたしね、お爺さんの代わりに渡すだけですもの。……ちえ、ヒョーダーさんが怖いから飼い主さんに言われた事に背くわけじゃないですよー！」

「んん……つと、これは火打石で、強走薬……」これは？

「あつ！それ…………それは駄目ええぶぶふつ！！！」

「ちょっと黙つてよー……それは迅竜の骨髄だねえ。夜ちゃん、それこつちに渡してくれるー？爺さんが詫びにくれるらしいから

「ふがもももつ」

「あの、逆鱗しか……なくて……」

「もー、夜ちゃんつたら泣きそつた顔してー……大丈夫、夜ちゃんは悪くないよ？」

「泣き、顔もそそののつ……いだだだだだつーー！」

「テメーは黙つてろよ、老いぼれがああーー！」

下手な事をしたらこいつに怒りの火の粉が飛んできそうですが…くす

んと鼻を鳴らす私の頭をぽんぽんと撫でて、スウェーツさんはお爺さんの荷物の奥の奥（…が、あつたんですね…）に手を突っ込みました。

「あつたぞ碧玉」

「流つ石スウェーツ一代わりに石」ひろでも入れてやんなつ」

「あ、ここにも……合わせて三つか

時化シケてんな

「お…お前ら…それでもハンターか！？」

「ああん？ ハントしてんだるーが

「これはタカリじやろうが…！」

「……いいか、夜。やられたらやり返す、またやらかそくなんて考
えないくらいに絞り盗るのがハンターだ。太く逞しく生きるんだぞ
は、い…？」

肩に手を置き、いつもと変わらぬ顔のスウェーツさん。……私の中
のスウェーツさんがどんどん変わっていきます…。

それでもやり過ぎじゃないかとチラチラ見ていたら、「夜もセクハ
ラの被害に遭つたんだ、気にする事は無いし許すな」と。さつと咲
もそう言つだらうと言られて、やつとじくじと頷きました。

「…………そらう、とつとと失せな…」

「ここの…盗人が！極悪犯罪者が…！」

ペいつと放した…いや、投げたチエダーさんにそう吐き捨てて、お
爺さんはスウェーツさんが投げ渡した荷物を抱えて転ぶように逃げ

去りました。

小さくなる背を鼻で笑ったチエダ－さんはぐるりと振り向くと、溜息を吐いてスウェイ－ツさんの隣に腰掛けました。

「まつたぐ。いい歳にして色惚けとか勘弁して欲しいよ」

「人恋しかつたのでしうかねえ」

「…夜ちゃんはもつと警戒心持たないとね。恋人でもない異性に胸を触られるなんて重罪だから。極刑だから」

「え　　でも、チエダ－さんはスウェイ－ツさんの胸…」

「あ、あああああれは…！」こいつが痴女だから…！…！」

「私はスウェイ－ツ限定の痴女だから。…何かスウェイ－ツの顔見ると胸揉みたくなるんだよね…」

「女顔つて言いたいのか！？」

怒鳴るスウェイ－ツさんの唇に強走薬の瓶を当てて、「私、君の綺麗な顔が大好きだよ」と悪戯つ子のような笑みを浮かべました。

それにそっぽ向くスウェイ－ツさんにこつそり笑つたチエダ－さん。何故か迅竜の骨髄を私に持たせるのに、こてんと首を傾げました。

「夜ちゃんも被害者だからね。私が逆鱗と碧玉三つ、夜ちゃんに骨髄と火打石、一緒にとつちめてくれたスウェイ－ツには強走薬…と私から、蜂蜜」

「あ、じゃあ私は…ペイントボールと投げナイフを」

「ちょ　ｗｗペイント　ｗｗボール　ｗｗ」

「……ちょうじペイントボール無かつたから、有難いよ…！」

「スワイーツが叩いたー！」

「うつせー！蜂蜜投げられないだけ有難いと思え！」

「あ、蜂さんが…」

「……え？ ちよ、蜂蜜の中に蜂が5・6匹沈んでるー…？」

「栄養たっぷりで良かつたじやん」

「良くねーよ！お前俺が虫嫌いなの知つてて……あ？何だ、あれ？」

蜂蜜をしつかり握ったまま、スワイーツさんは向こうへと指をさしました。

見れば何とも無いのですが、……一分経つた頃でしょうか、何かが光っています。

「ジンオウガかねえ」

「…どうするよ」

「下級ですが……その、私…武器が…」

「上級ハンター一名とはいえ、ジンオウガ向きの武器じゃないしてかアオアシラしか出ない筈なんだけど」

「狩り場が不安定だとも言われてないしな…。」（）は一旦引くか？ 狩ることもないだろ？

「村に来なければ別に良いんだけどねえ」

「報告だけしておくのはどうでしようか？」

「そうしようか。じゃ、今日は帰りましょっと」

そうして、私達三人は仲良く家路についたのです。

報告を終え、付き合つてくれた事の礼を言い　　それから、私は家の掃除をしてくれた猫達をもふもふして、飼い主さんが干して行つたのだろう洗濯物を取り込んで置み終わつた後、びくびくしながらじやが芋のスープを作つていました。

スープなら後で温めるだけですし、他の料理は飼い主さんが来てから猫達が作ってくれるそう。私はコトコトと煮込む鍋を背に、ゆつくりゆつくり林檎を剥いていました。

この一年半で、私はこれだけの家事が出来るようになったのです！

今でも（兎時代の名残か）火が怖いのですが、料理に使う火ぐらいならば手を出せます。これも飼い主さんが狩りに行つてる最中、キンブの火の面倒を見続けた成果ですね。

包丁は見よつ見まね、猫達の指導に基づいてなのですが　　飼い主さんのような林檎の兎にならないのです。さつきの子なんて耳が半分折れてしましましたし。

「……痛つ」

しかも、手までざつくつ……飼い主さん、早く帰つて来ない

かな……。

慌ててすっ飛んできてくれた猫さんに薬を塗つてもらいながら、変な鬼を齧つては、ちりちりと扉に皿をやります。

今はまだ夕暮れ。飼い主さんが帰つて来るまでは時間がたっぷりあります。

だけど……もしかしたら、早く帰つて来てくるんじゃないかなって、期待してしまう。

そんな私の視線の先、急にノックの音が！

私は包帯を持つた猫を背に、急いで扉に駆け寄りました

「あの、スウェーツなんだけど」
「チエダーさんもいるよー！」

……思わず、（、；；；）な顔で扉を開けてしまい、お一人に心配されました……。

「ありやりや、夜ぢやござつくりやつたねー？」
「林檎を剥いていたら……情けないです」
「いや、ここまで剥けたんなら大したもんだ……で、これよかつたら、お裾分け」

「わっ申し訳ないです！」

「いーのいーの。スウェーツは多く作つた子だからね。それに今日は咲ちゃんも遅いし……夕飯食べた？」

「はー、林檎を」

「……林檎を？」

「林檎を」

好物なのです、と言えば、お一人共すゞく泣い顔をして見つめ合つてます。本当に仲の良い二人ですよね。…………飼い主さん（ 、 、 、 ）

「あの……俺、何か作ろうか？」

「いえいえ、大丈夫です、飼い主さんが作つた残りもありますし……」

「ああ、それ？鍋が一つあるの」

「ええ、右のがさつき私が作つた……」

「作つたー？」

「はい……じゃが芋のミルクスープ……」

「…………え、どうしよう。私この子より年上なので……作れない」

「お前は作ると毒薬しか作れねーもんな」

「田玉焼きは作れるよー。」

ああ、そうかよと冷たく言うスウェーツさん。飼い主さんに似ていのに似てるように思えてきました。

そつするとだんだん、なんだか悲しくて、小さく「くすん」と鼻を鳴らしてしました。

少し俯いていると、チエダーさんの「じゃじゃじゃじゃーん！」と

いう声と共に綺麗に布に包まれていた箱が開いて、スウェーツさんが作ってくれたお裾分けを見せてくれました。

「綺麗なお菓子…！」

「あ、ああ、得意だからな…」

「夜ちゃん、この菓子は他のと違つて異様に甘いから、食べる時は咲ちゃんにやるんだよ」

「おま…何言つて…何で分かんの…!?」

「摘まみ食いしたから」

「だから一個足りなかつたのか…つて無断で食つた…」

「ちゃんと『『じつあん』って言つたじやん』

「『じつあん…?』

「ああ、『御馳走様』つて」と

「夜は絶対使うなよ、使つた日には俺らことばっかりが来る……つてテーブルに座るなつ 行儀の悪い…。」

そう言つてチエダーさんの為にスウェーツさんが椅子を引いてあげると、またも扉が　　今度は激しく　　叩かれました。

「ハンターさんつハンターさん…大変、ジンオウガが　　…！」

思わず固まつた私とスウェーツさんに背を向けて、チエダーさんが素早く扉に手をかけました。

*

「おっしゃー！獲つたどー！…」
「うっせえ。叫ぶな」
「えー、だつて折角の勝利の余韻が……え、何処行くの？」
「暑いから帰る。用もないし」
「え、ちょ、待って、俺を一人にしないでえええ！…」

「ふう、やっと帰れるな…」

「なあなあ、咲はこっちに泊まんねーの？今から帰るとか疲れんだろ」

「別に。今回はジャックが出張つてくれたから負担もそんなに無かつたしな」

「なあなあ、俺と一緒に褐色の美女と…」

「婚約者はどうした」

「ちげーって！此処にな、褐色の美人歌姫が居るんだってー！俺の婚約者はキヤワイイけど、偶には違う女の子も見たいのが男だろー？手を出すのは流石にアカンけど、見る分には別に良いじゃん！」

「お前……だから婚約者にホモの噂流されるんだよ……」

「あいつも分かつてね。俺はシェリー一筋なのにさー？俺は本命以外は見ておくだけにしどきたい派なの！」

「いや、お前はヘタレなだけだろ」

「ちーがーいーまーすー……つて、咲、お前またそっち行くの？」

「……他の奴と会いたくないんだよ」

「もつ誰も兎ちゃん事件の事は言わないってえー！一部のハンターからは『意外過ぎて可愛い！』とか言われてんだぞ、お前」

「……？女のハンターなんか乗つてたか？」

「あ、いいや、『そっちの『ハンターさんが……』」

「俺絶対この部屋から出ない。……じゃあな。お前も噂が本当にならぬいように気をつけろよ」

「え、ちょ、ちょー待つて、俺も！俺も！」一緒にせめておこいい

「…」

*

寂しいのはお互い様なハンターさん×ずっと飼い主さんしか考えてない兎ちゃん×セクハラだけは許せない（ここだけピュアな）ハンターさん×セクハラに怒ったけど彼女のキレ方に引いたハンターさん

3・好物は林檎、林檎の鬼なのです（後書き）

オマケ

チエダーさんは上級ハンターだけど貧血になりやすくて砂漠にはいけない設定。凍土も同じく苦手だけどなんとか大丈夫。

料理できないのは猫任せ、^{スワイーツ}後輩が色々持つて来てくれるから。ついにか本人がやる氣出して調理しようとすると誰かが止める。普段料理じろりと見つけて言いつぶせに何故か止める。

スワイーツと咲の違いはスワイーツはツンとしてても照れたり笑ったりするけど、咲はなんか寡黙。溜息と眉間にしわを寄せるのがデフォ。でも内心可愛くてふわふわしたものが好き。

年齢は特に決めてないけど、チエダーさんは咲と同じ年か一二個下。スワイーツはチエダーさんは三歳下。鬼さんはこの中で一番若い。

4・保護者は飼い主さんですよ！

「ジンオウガが、村に迫つてきていると…」

「すでに村人が何人か…」

「ジンオウガ以外にも…」

がたたたたたつ

慌ただしく坂を下るネコタクの上で、私達三人は持ち物の確認などをしていました。

ちなみに私達以外のハンターで上級はチエダーさんとスワイーツさんのお二人ともう一人、療養に来られた人だけ。

下級は私と二人（旅の途中、この村に寄つて來たらしいです）いるのですが、二人共ジンオウガは相手に出来ないと断られ、結局三人で討伐クエストを受けました。

スウェイーツさんは最後まで反対していたのですが、私が飼い主さんに留守を頼まれているから果たしたいのだと頭を下げる、渋々了承してくれました。

チエダーさんはジンオウガ以外の相手の目を引きつけてくれればいいから、絶対にジンオウガに手を出さないことをわく、何度も約束しました。

「異持つたし…よし、」
「巻き込まれないよう頑張つてね、一人共」「はいっ」「夜ちゃんは向こうに着いたらずつと耳を澄ませておくんだよ、駄目だと思つたら逃げること」「はいっ」「あまり緊張すんな。過度の緊張も危険だぞ」「はい…」「夜ちゃんはずっと咲ちゃんと一緒に狩つてたもんねえ。しうがないか」「着いたニヤーーー！」

でも、チエダーさんは咲ちゃんより強いから、心配は無用さー。と頭を撫でてくれるチエダーさんと、その隣で頬杖をついて口元を緩めるスウェイーツさんに「はい」とだけ言つて何とか笑つてみせました。

「あいよつと。…一人共準備運動してから行くー？」

「いらねーよ

「大丈夫です」

「うつし、じやあ行くぞー」

弓の練習をしに行く時のような調子で、チエダーさんはライトボウガンを確認した後、私達の先頭をきつて歩き出しました。

(……耳が痛いくらい静かです…)

辺りは夜という事を踏まえても異常に静かで、私は自分の足音やお二人の装備と武器がぶつかって鳴る小さな音に怯えてしまいます。…

思わず立ち止りそうになつた時 バチリ、という音が遠くから、確かに聞こえました。

「チエダーさん! 向こうのエリアです!」

「おお? 早いねえ」

「バチバチいつてます」

「……行くのが嫌になるな…」

私の言葉に駆け出すお一人の背中を慌てて追いかけながら、私は唇を強く噛みました。

怖がらないで 飼い主さんに頼まれたでしょう。留守を守らなきや。

大丈夫、飼い主さんだつて、私にハンマーを持たせたら下級クエストにお前の敵はいないつて頭を撫でてくれたもの。私はお一人に向かってぐるモンスターを叩けばいいだけ。大丈夫、大丈夫……。

「いたよ！スワイーツ！」

「よつ……と」

「ちょ 本当に下手くそだね、スワイーツ君は」

「うつせ ！」

「まあいいけどね、一応当たったみたいだし」

よつこらしょ、とチエダーさんはボウガンを引つ張り出すと、パン、
とジンオウガの頭に打ち込みます。

同時にジンオウガが身じろいだ為に掠つた程度のダメージにはなつてしましましたが、ジンオウガが私とチエダーさんに襲いかかるう
とする事で時間を稼ぐことが出来ました。

放電の後、ぐ、と身体を後ろに引いたジンオウガの足下に辿り着いたスワイーツさんは、思いつきり双剣で大きな足を切りつけます。

当然足の痛みの方に顔を向けるジンオウガでしたが、チエダーさん
に撃たれて慌ててこちらに向くと、足下のスワイーツさんを無視し
て飛びかかってきました。

「……つ、と」

「ナイス夜ちゃん！」

それを私のハンマーで殴り付ける事で防ぐと、チエダーさんの撃つた弾が爆発。私の氷のハンマーが煌めきながら、今度は仰け反ったジンオウガの頬を殴り付けました。

もう一撃　　そう意氣込んだ時、じけんじ近づく大猪の音に気が付き、慌ててハンマーで背後から迫る猪を殴りました。

チエダーさんは私を一警するも迷ったようで、ジンオウガの電流が放たれるまでその場を動かず、何発か撃つては援護してくれました。

「夜ちゃん避けて！」

私とチエダーさんが両端に逃げて放電をかわすと、私はそのまま猪を殴りつけながら別のエリアに移動します。

「無茶しないで、危険なら逃げるんだよ　　！」

「はいっチエダーさんもお気をつけで…！」

お互に早口にそれだけ叫ぶと、やがて襲いかかるモンスターだけに集中しました。

(……どうしよう。まさかドスファンゴだなんて…相性悪い…)

アオアシラヒジンオウガと相性の良い氷属性。でも猪には相性が悪い。
……もうちょっと考えておけばよかつたのでしょうか。

……まあでも、お一人がジンオウガを倒すまで持ちこたえればいいだけですから、別にこの子を倒さなくともいい。……の、ですがこの子とは、兎時代からの因縁があるのです。

私が丸まつて寝ていれば突進。私が誰かとじじゃれ合つていれば割つて入つて邪魔をする。食べ物（植物）も荒らされましたし……ああ、何度泣き寝入りしたことでしょう。

この子もさつきのジンオウガも、かなり大きかつたですが（記録更新間違い無しですね）絶対に負けられません。討てないにしろ、その牙だけでもパツキリポツキリ折つてやるのです！

「やあ

！」

声と共にハンマーで横腹に一発お見舞い。

僅かに揺れましたが、何だか堪えてなさそう。もう一度横腹に殴りつけ、思いっきり振り下ろしてみて、やっと退いてくれました。

ぶるぶると鼻を鳴らす猪の機嫌がかなり良くないのを察知してハンマーを仕舞うと、急いで距離を開けようと駆け出します。あつ。

（嘘、アオアシラ

）

思わず足を止めてしまった私は、迫るドスファングの突進をモロに受けてしまいました……。

*

「そいやー！」

「キャー、スウェーツ君カッコイイー！」

「棒読みで褒められても嬉しくねーんだよー！」

「ふー」

「ふーじやな…おま、薬草噛みながら撃つてんなよ…」

「や、だつて生えてたから…なんかもつたいないかなつて」

「食う方がもつたいなくね？」

「そう あ、スウェーツ左に避けて」

「あん?……うわわッ」

「よそ見してんなよー。だから蜂蜜だらけになるし、ペイントボルも急カーブするんだぞー」「うっせーよー！」

「なんかあと少しつつ感じ。…夜ちゃん大丈夫かな…」

「今日は狩り場が不安定すぎるからな…」

「さつきのドスファンゴとかね……あと少しだし、スウェーツ助けに行つてあげてよ」

「え、でもお前は…」

「大丈夫大丈夫。後は爆殺するだけだし。一応罷ちようだーい」

「…（…大丈夫かな）」

「夜ちゃんの事、よろしくね」

*

此処は、何処なのでしょう…。

最後はがむしゃらに逃げて、殴つて、猪の牙をぱつきり折つてやつて。そしたら宙に投げ出されて。転がり落ちて……ああ、思い出した。確かエリアフの端の端、背丈の高い草に隠された　大人が一人丸まるる程度のくぼみ（もしくは洞穴？）に入ってしまったのでした。

運良く見つからなかつたのでしょうか…。

（あ……装備、所々破れてる…）

私の兎だった頃の毛皮で出来た装備。真っ黒で、ふわふわしてて。飼い主さんの隣にいる時のように、着ていて落ち着く、私の毛皮。

見ればいたる所が土で汚れて、腕とスカートが裂けてて、足はまるまる一本じくじくと痛くて。頬も擦り切れたのか、時折頬を撫でる風が滲みてきます。

(お一人は無事でしょうか…私が相手をしてられなくなつたモンスターのせいで、大変な目に遭つてないでしょうか…)

そう思うととても不安なのに、私は震えるだけで身体が動きません。起きようとしては崩れ落ちてしまつのです。

ああもう 本当にやめんなさい。あんなに連れてってくれと、役に立つからと強請つたのに、もう痛くて歩けないんです。寂しくて心が折れそうなのです。

だつて、こんな目に遭つたの、初めてなんです……。

兎の頃は一人ぼっちで、「夜」になってからは飼い主さんがいつも近くにいて、庇つてくれてたから。知らなかつたんですね……。

負けたことなんて、無かつたんですね……。

(留守、頼まれたのに。お一人に押し付けてしまった……)

飼い主さんは役立たずつて言ひでしょつか。お一人にはお荷物と思われたでしょつか。…私は、じつやつて帰れるんでしょうか。…。

ぼつ、ぼつ……ぱたたたた

(雨、降つてわからつた……)

手の甲に、頬に当たる雨
見ててとても寂しくて、寒い。

(…帰りたいです…お家に帰つて、火に当たつて、飼い主さんの膝に飛び込んで、叱る声も気にせず…、そのまま頬ずりをして。今日の事をいつぱい話したい…)

飼い主さんに褒めて欲しくて、じゃが芋のミルクスープ、頑張つて作ったんです。

弓はやつぱり駄菓子だったけど、練習したらもしかしたらいい、チヒダーさんが。ああ、あと、スワイーツさんがお菓子をくださたんですよ。一緒に食べましょう?

…飼い主さんの方はどうでしたか?砂漠つて暑いのでしょうか、辛くはなかつたですか?船はどんな?

(あつと飼い主さんは何かから話せばいいのか迷つて、眉を寄せます。そして一つ一つ、ゆっくり話してくれる。…ああでも、その前に、飯だつて言つのかな)

目が熱い。何かが目からとろりと落ちていくのが分かります。

負けなかつたら、こんな思いしなくて良かつた（この時になつて、初めて私は『悔しい』という感情を知りました）のに。勝つてたら、早く家に帰つて、飼い主さんを出迎えて、留守を守れた事を褒めてもらえたのに…！

（呆れるかな。駄目な子つて思われるかな。穀瀆しつて言われるかな…）

私、朝のネコタクに乗りながらずつとずつと思つてたのです。今度は嫌な顔しないで、朝作ってくれた肉を葉っぱで包んだスープと一緒に食べたかったとか、「美味しかったです」って言いたかったとか。

もう、そんなの、無理なのでしょうか。また一人つきりなのかな…。

遠くで、大猪特有の足音がする。草を搔き分ける音がする。もう駄目だ。次はきっと見つかる。見つかったら……どうなるのでしょう。

「…………あいたい、よう…………」

かいぬし、さん。

「……く……るひ……くら、……黒
！何処だ
「あ……？」

雨の音、斬り付ける音。悲鳴なのかよく分からぬ声。飼い主さんの、声……！

続いて聞こえる、どおん、と倒れる音に思わず身体を震わせて、私はもう一度腕に力を入れます。そろそろと身体を支えている腕とは反対の手で、草を掻き分けました。

「や」かっ！？

草が触れあってガサガサと鳴るのに気付いて、飼い主さんはビチャンとかパシャパシャと音を鳴らして私の名前をずっと呼んでいて。

「……し、さん。かいぬしささん。飼い主さん！」

飼い主さんの腕が遠くに見えた瞬間、私は駆け寄ろうとして足の痛みによるめこて、ばしゃんと水溜りの中に埋もれてしまいました。

身体を起こして頭を振ると、ガサガサと鳴る草の音は止んでいて、息を飲む音の後に、飼い主さんの大きな腕が身体を抱き起こしてくれました。

「飼い主さん」

「黒ツお前…留守を守つていろと言つただろうが！」

「……ごめんなさい。お役に立てなくて…」

言われるだらうなと分かっていても、実際言われるととても申し訳なくて。私は思わず零れそうになる涙を堪えようと震えてします。

すると飼い主さんが慌てていつもの通り大きな手で涙をぬぐい取ろうとして、……戻してしまいました。

それが寂しくて、どうしてだらうと飼い主さんの腕を見れば血と、葉っぱで薄く切れた傷だけでした。

「……どうして家にいなかつた？」

「……飼い主さんに、留守を頼むつて、言われたから……」

「……あ？」

「……留守……」

「……？」

「……（ 、 ； 、 、 ）」

「……あの、アレか？もしかしてお前ことつての留守つて、

俺の代わりをする」とか？

「……飼い主さんがそう教えてくれました……」

あれはこの村に来て一ヶ月経った頃でしょうか。
急なクエストに出ていく事になつた飼い主さんに、初めて留守番を
頼まれたのです。

『 飼い主さん』

『あ?』

『留守つて、何ですか?』

『留守はー…アレだ、俺がやる事をしたりするんだ。洗濯とか掃除
とか…あ、今日はもう終わつたからしなくていいぞ。外に出ないで、
家でじつと待つてろ。…な?』

『待つ……』

『……?』

『(、 ; ; ;)』

『泣くなよ……』

という風な説明を受けたのですが。

留守=「飼い主さんがすること」と、飼い主さんは今回みたいな緊
急クエストも参加していたから、参加したのですが……。

「違うのですか?」と首を傾げたら、飼い主さんは急におでこに手
を当てて俯いてしまいました。

「……なんでおつにもよつて後半部分を無視するんだ

「？」

「しょうがない、そこいら辺は後で教え直そう……どうした？」

「あのつ、あの……」

私の装備の切れ具合や傷に目を向けていた飼い主さんの手を握つて、私は顔を見れなくて、ずっと飼い主さんの手を見つめていました。

「私に、呆れましたか？役立たず……ですよね……」

不安のあまり思わず口から飛び出た言葉。飛び出したら余計に不安が増して　もしこの手が振り払われたら。「ああ」と溜息交じりに言われたら、私はどうすればいいのでしょうか？……？

「ばあーか」

飼い主さんは俯く私のおでこを、ペチンと弾きました。……地味に痛いのです。

「……俺が何度もお前に呆れたと思ってんだ。朝は布団から出ようとして、ひつひつ離れない、肉は食わない、菓子食つ時はいつも口にカスが付いてるし、チエダーアンチくしょうの言つ事は鶴呑みにするし、拗ねると何をやらかすか分かつたもんじゃないトラブルメーカーだし。……だけど、そんなお前に呆れはしても役立たずと

思つた事はねーよ

「せ、本当ですか……」

「ああ」

「黙田な子とか、愈け者とか、穀潰しどか、金食い虫とか……」

「……おい。誰からそんな言葉を教えてもらひた」

「隣のおば様が言つていたのを聞きました」

「……」

意味は分からぬですけど、とつあえず罵り文句といふか、不名誉な言葉なのだと思つてこます。

「……思つて、ませんか……？」

「……思つてねーよ」

「本当じ?」

「本当じ」

「私の事、何処かに捨てたりとか……」

「しねーよ」

「じゃ、じゃあ、ずっと傍にいてくれますよな……？」

「……」

「飼い主さん……（、；、；、）」

「……いや、だつてお前、これは何といつか、返事のしよひが……」

「（、；、；、）」

「……だああああーー分かつたよーー傍にこむれ、お前が出てくまではなー！」

「やつたあー！」

その言葉だけで、空はまだ雨が降つてこるので何故か晴れてこるよ

うな気分になれます。

私はそっぽ向いてる飼い主さんに気持ちのままに抱きつくり、胸に頬を擦り寄せて叫びました。

「飼い主さん、大好きです！」

あの雪の中、初めて何日も私に会いに、遊びに来ててくれた人。私を拾ってくれた人。

あの日から私は飼い主さんが大好きなのです。わしゃわしゃしてくれる大きな手が大好きなのです。私を受け入れてくれる懐の広さが大好きです。

「……あ、ああ。そうか」

「飼い主さんはー？」

「あー……嫌いじゃない、ぞ」

「(、・・・)」

「……まあ、好き、かな」

わしゃり、と髪を撫でてくれる飼い主さん。何だか嬉しくて、思わず眉を寄せた飼い主さんに笑いかけたら、ちょっととの沈黙の後、コホンと咳を出しました。

「風邪ですか…？」

「ちげーよ。これは……いや、どうでもいい。ほら、傷の具合

は？」

足とほつぺたが痛いです。あと全身痛いです。…と答えたらい、飼い主さんがおぶ るうとして、太刀が邪魔で無理でしたので、抱き抱えて貰いました。

あ、ちなみに私の武器のハンマーは猪の身体に一度良く挟まついたらしく、猫達が回収してくれたとの事です。

「あつお」一人が
「行つたらチエーダーが仕留めてたぞ。スウェーツは…蜂蜜まみれだ
つたが」

「朝からずつとですね…蜂蜜に縁があるんでしょうか…」

「いや、呪われてんだろ、あれは」

あれは近くから見ても化け物だった。思わず太刀を抜く所だつたんだ、と遠い目をする飼い主さん。

やつといつもの日常に戻れたような、お家に帰つて来たような安心感に包まれた私は、ふと飼い主さんの腕の中で香る、血の香りの中に汗の香りが混じつていることに気付きました。

しかもよく見れば最初のクエストとなんら変わっていない（今回のクエスト向けじゃない）装備です。……急いで、探しに来てくれたのでしょうか。

「…………あのですね、夕飯にじゅが芋のミルクスープを作ったのです

「ああ、じゃあお前のこの手の怪我はそれか
違います。これは林檎を剥ぐのに失敗して出来ました」
「何で威張つてんだ」

(まるで、魔法のよう)

雨はまだやまざ、ぱつぱつと類に当たつてこましたけれど、もう寂しことは思わなくなりまして。

むしり、静かに落ちるそれが、とても綺麗な宝石に見えて。

「……やつぱり、飼い主さんじやないと、綺麗な鬼さんは出来ませんでした」

「…そつか」

「帰つたら、作ってくれますか？」

「ああ。…帰つたら、その林檎のせいで起きた嫌な話を教えてやる」「嫌な話……？」

「癖は恐ろしいって事だ。…いや、本当に癖つて怖いな」

「お船の事も聞きたいのです。…あ、それから飼い主さんにお見せしたい物があるのですよ。スワイーツさんからお菓子を頂きましたから、一緒に食べて、聞きたいです」

飼い主さんがぶつきらぼつな声で「そつか」とだけ言つのが、とても優しく聞こえるだなんて。……飼い主さんはまるで、魔法使いみたいですね。

* 超特急で探しに来た保護者ハンター、『鬼ちゃん』に一瞬惚れかかる、
の巻。

4・保護者は飼い主さんですよ!（後書き）

オマケ（備考）

今回のクエストに出てくるモンスターは実は下位レベルじゃなくて上位のモンスター。調査が不十分な状態でのクエストだつたせいで夜ちゃんはエライ目に遭いました。

でも馬鹿力なので頑張って一人でドスファンゴの牙をパキッと折れる位には実力があるし、咲ちゃんがいればもうちょっと善戦します。

ちなみに夜ちゃん兎時代の名残の毛皮はかなり上等です。夜ちゃん討伐のクエストは実は上位クエストだったのです。……で、その毛皮を防具にしてるので、攻撃力はまだまだ下級ハンターなのでアレですが防御力は上級レベル。……見事に破けちゃったけどね!

* オマケのおまけ。咲ちゃんが迎えに行くまで

急ぎ足でお家に帰る 家に誰もいない 猫と村長から話を聞く 何か色々言われたけど無視してネコタク超特急コース 上級装備で遠慮なく出会つモンスターを血祭り（狩り）に まっくろくろすけでておいでーー…という流れ。

夜ちゃんはまだ精神的に幼くて、家族愛と恋愛の違いが分かつてない感じです。咲ちゃんもそれは分かつてるんだけど、肉体年齢とのギャップにくらつときちやう事が偶にあります。

今回は夜ちゃんが出ていくまでは言ったものの、自分彼はあの手この手で夜ちゃんの自立を邪魔するだろくな」とこっそり覗いていたチエダーさんは思っちゃう訳です。

……ちなみにチエダーさんはキャンプに着くまで見つからなことついにこっそり覗きながら一ヤ一ヤします。そして色々な所が泥だらけ草っぱだらけの咲ちゃんを帰り道にからかう予定です。

5・甘えん坊な性格です

もんじゅお布団から顔を出して、『ひま、 飼こせれ』。

もつねぬなのです。起きて欲しいのです。スープを温めたんだよ
……猫ちゃんが。

ねえねえ、 飼こせれん、 飼こせれん。

「…………お、おおお、お前何で俺の布団に潜り込んで
るの…？」

「昨日、飼い主わざと一緒に寝たこいつと言つたり『ふあん?』て答
えてくれたので、いいのかなって」

「おこつそれは返事じゃな…………黙だ、黙こ……」

「『飯ですよー!』

「抱きつかない」

やつぱつて私をベッドから落とすとして、昨日の打ち身と足の傷
(お薬のおかげで打ち身はだいぶ良くなりました)の事を想つて出していく
れたのかすぐにせめると、洪々上半身を起します。

顔を覆つぱうて口の手を拭いて、「見て…」とだけ呟きました。

「飼こせれど、『飯食べたら』『ロロロ』してたくせん喋つてしまつよ。
今日は猫達が家事をしてくれたのうなのですよー」

「あー？…ああ、そういうえば昨日そう約束したな…」

「じゃが芋のミルクスープ、食べて下さいよー」

「ああ、それも約束したな…」

「林檎の兎…」

「約束、したな…ふあ…」

あと十五分待つて。と枕に顔を埋めようとする飼い主さんに貼り付いて、私は布団の中で足を（無事な方をですが）パタパタしました。

「十五分って、どれぐらいですかー？」

「…六十を、十五回」

「六十？」

「…十を六回。それを十五回繰り返せ」

「えつと、十を六…うー、やだやだ、飼い主さん起きて下さいな。兎は寂しいのが嫌なのです。昨日はとても寂しかったんですから、構つて下さいな」

「俺は昨日疲れて帰つて……あれ、何か肩に柔らかい
「む？」

眠たげな顔で肩を見遣る飼い主さん。その肩の上には私が乗っています。

「く…」

「く？」

「黒おおおーーお前ツなんて破廉恥な格好してんだあああーー」

何故か怒られた格好ですが 飼い主さんの物なのでぶかぶかな
白い木綿のシャツ一枚を着ているだけです。（普段は駄目って言わ
れています）

でも昨日、あちこち怪我だらけだからって渋々了承して……あ、さ
つき布団の中でも「もじもじ」動いてたから、ボタンが一つ開いてます。
なんか寒いなーって思つてたのですよ。

「破廉恥つてなんですか？」

「そこからー？そこから教えなくちゃいけないのかー？『いうかお
前、下着はどうしたー？』

知らない単語を尋ねたら何故か下着の有無に。だけどその前に胸元
が寒いので飼い主さんにもつとくつつきたいのです……思わ
ず「ぎゅっ」としたら叩かれました（・・・・・）

「……穿いてますよ？」

「下じゃない！上だ上ーむ、…胸はー？」

「…ええ、チエダーサンが、夜には付けない方がいいって。き
つと飼い主さんもその方がよろしく」

「喜ばねーよー！…あんのチーズ野郎、今度会つたら　　会つた、
…」

私の返答にガバッと起き上がつて（私は跳ね飛ばされる形で起きま

した）の会話だったのですが、飼い主さんは不意に視線を下に、私の左足に置かれた、飼い主さんの手に向けます。

す、と震えた指先が私の太腿を撫でて、「くすぐったいです」とふにやりと笑つていいますと、飼い主さんはそのまま黙つて布団を被つて丸くなりました。

「か、飼い主さん…？」

「昨日の今日でこれは無いだろおおー…？」

「あの、飼い主さん」

「くっそ、これがわざとだつたのなら…！何で無自覚なんだよッ！
い歳した娘が足を出すんじゃねーよッ」

「か、飼い主さん…」

「何で洗剤も洗髪剤も住んでる所も一緒なのにお前だけいやに良い匂いすんだよッなんで甘い匂いするんだよッ肉もつと食えよ馬鹿！」

「（ ； ； ； ）」「

*

結局その十五分後？に飼い主さんは部屋から出でました。

私は拗ねて飼い主さんの足下で寝ていたのを横に担がれ、（その前

にきつちりボタンを閉められました) 一人で「遅いーヤーー」と怒られて肉球に頬を打たれてから席に着いたのです。

「……うん、ちゃんとよく煮込まれてるな」

「じゃ、じゃあ、美味しいですか? ねえねえ、美味しいですか! ?」

「ああ」

「えへへー」

飼い主さんは相変わらず食事しか見ていないけれど、撫でてくれなくともその言葉だけでとても嬉しいのです。

私は意を決して葉に包まれた肉をもぎゅもぎゅ食べて、吃驚した飼い主さんに「美味しいです」と言いました。

「……そつか」

「はい。私もミルクスープ飲みたいです」

「ああ、ほら」

ずいつと息を吹きかけて冷ましたスープを私の口元に出されたので、温くなつたスープをスプーンごと口に入れました。

「……あ

「?」

「いや、何でもない。……どうだ?」

「美味しいです」

「そうだな、と飼い主さんが白パンを千切つて頬張るのを一瞬一瞬見ていたら、飼い主さんにパンを突っ込まれました…。」

「……昨日はどうだった？」

「チヒダーセン、もう少し練習してみよつて。それからスワイーツさんのペイントボールつて急カーブの出来る機能付きなんですよー蜂蜜だらけになつてましたし」

「あいつ本当に上級ハンターかよ…」

「お一人と一緒に」でアオアシラを倒したのです

「よかつたな」

「それで……あ、そうだ！」

「いけないいけない。飼い主さん見てみよつと思つてたのこ、すっかり忘れていました。

私はパタパタと収納ボックスの中を探ると、両腕に抱えて飼い主さんの元に戻りました。

「……迅龍の骨髓…？お前、それをどうした？」

「お爺さんから頂きました」

「行つたのは渓流だらう…」

「御兄弟から譲つてもらつたらしきですよ」

「…それをどうしてお前が貰つんだ」

ええつとですね、三人でタケノ口を探つていたら、お爺さんがチヒ

ダーサンのお尻に触つて、私の胸を掴んでき、スウェーツさんの双剣で髪の毛剃られて、チエダーさんがすぐ怒つて、蹴つて踏んで胸元を掴んで。

チエダーさんが「詫びに荷物の中身をくれる」って言つから、……だつて怖かつたのです、私だつて駄目じやないかつて言いましたよチエダーさんの欲しがつてた碧玉と逆鱗、私に骨髓と火打石、スウェーツさんに強走薬。……と、チエダーさんから蜂蜜。私からペイントボールと投げナイフをあげたのです。

「…………あのジジイ…………！」

てつくりチエダーさんを怒ると思つたらお爺さんの方に怒りを感じたようです。

「今度会つたらモンスターの巣に放り込んでやる……」
「あ、それチエダーさんもおつしゃつてました」
「…………崖から落とすか」
「もういいぢやないですか、過ぎたことですし」
「そもそもお前な、胸揉まれたのになんでそんな平氣そうな顔してんだ！チエダーの反応が普通だろ？怖いとか気持ち悪いとかあんだけ！？」
「気持ち悪かつたんですけど……なんか見てて可哀想になつて……」
「甘い！今度やられたら腹に蹴りの一発でも入れるー！」
「でも…………」
「お前は他人に甘すぎなんだよー！」

怒りながらも私の分もお茶を淹れてくれる飼い主さん。お揃いの力

ツプを見ながら、私はパンを両の手で弄りました。

「……だって、昔、言われたのです」

「あん？」

「『人間は脆いから、何があつても、もきゅもきゅしちゃ駄目』って

「もきゅもきゅ…？」

「飼い主さんと初めて会った時に遊んだ事です」

「おま……アレは『もきゅもきゅ』なんて可愛い擬音を使つていい
レベルじゃなかつたぞ…！？」

飛びついて、ぐるぐるして、兎パンチ。積もつて山のように高い雪
の中に突っ込んで埋もれてしまつた飼い主さん。……あれはやりす
ぎだつたなつて、一応後悔してるのでよ……。

「むむ……とにかく、私はやり過ぎてしまつから、氣をつけなさい
つて、手を上げては駄目つて教わりました」

「それは 兎の頃の話だろうが」

「そうんですけど……でも、私の力つて人より強いです……」

「……でも嫌な時は嫌だつて言え。言つても聞かない時は暴れてしまえ。我慢はよくないぞ……ほら、茶」

「ありがとうございます」

「お前は若い娘なんだから、余計 なんだ、そういう…身体を
触ろうとしたりとか嫌な事していく人間にははつきり拒絶しろ。き
つちり落とし前つけるんだ。……そういう所はチエダーを見習え」

「はい……ああ、そつ言えば、スウィーツさんが言つてました」

「…なんて？」

「『やられたらやり返す、またやらかそつなんて考えないくらいに絞り盗るのがハンターだ。太く逞しく生きるんだぞ』って。それが…」れ、なんですが」

食事の席に相応しくないと骨髄を片付けようとする猫達を指すと、飼い主さんは「ハンターじゃねえよ、それ…」と頭を搔きました。

「じゃあ今度は飼い主さんの番です！ねえねえ、砂漠を渡る舟つてどんなのなんですか？大きなモンスターと戦つたんですか？」
「あー…黒は絶対あのクエストを受けない方が良いぞ。耳がやられる」「えー？」

*

「」飯を食べて、家事をしてくれた猫さん達にお礼を言つた後、私は風通りの良い窓を見ながら、飼い主さんに薬を塗つてもうこました。

「……てこうか、なんだこんなにやわらかいつしてんだ？お前はどいつ

う林檎の剥き方をしたんだ」

「ただ普通に…林檎の鬼を作らつとつて失敗しただけなのですが」「だからその林檎の鬼をどう失敗したらこうなるんだよ…てい

うかお前、この状態でクエスト行ったのか…本当に馬鹿だな」

「（・・・・・）」

「服捲れ　　上げ過ぎー下げろッ」

「（・・・・・）」

「まつたぐ…」

もう少し恥じらっこを持って、と言にながら薬を塗つてくれる飼い主さん。

私がずっと（・・・・・）な顔をしていたら、しばらく黙つてから話題を教えてくれました。

「　　あのディスファンゴの牙を折ったのはお前か?」

「はい。ぼっきりやりました」

「途中、牙が粉々になつてたり三分の一の長さでそこらを転がつていたんだが　お前はどんな殴り方をしたんだ」

「思わず兎の頃の怒りがですね…例え負けても牙だけは折つてやると意気込んでました」

「仲悪いのかよ」

「ええ。だつて酷いんですよ…寝てたらぶつかつてしまふし、誰かと遊んでたら邪魔するし、『飯を滅茶苦茶にされたり妨害してきたり

「むしろデスマン』凄くないか、当時でかくて凶暴なお前に食

つてかかるとか」

「凶暴じゃないです！」

「……人を雪の中に埋めといてそれを言つが

「……（＼＼＼＼＼）」

全部の傷を塗つて包帯を巻いたりガーゼを貼り終えたのを再確認する、飼い主さんはわざと薬を仕舞おうとするので、あく、と握つて止めました。

「どうした」

「飼い主さんは、薬を塗らないのですか？」

「俺は草で切つたくらいだからな」

「私が草で切つた所は塗つてくれたじやないですか」

「そりや…女なんだ、傷は無い方がいいだろうと思つて…」

「この前、チエダーさんが怪我をした時は睡でも付けてるつて言つてたじやないですか」

「あいつはいいんだ」

「よくないです。……わしきのお礼に、私が塗ります。怪我した所出して下さいな」

「…分かつたから脱がそつとするな。腹を草で切る訳ないだろ」

「ドスマファンゴとか…」

「反撃する前に（上級装備で）狩つたからな」

「砂漠のクエストとか…」

「頬を薄く切つたくらいだ つてちよつと待て、その薬じやないぞ」

「これですねー…はい、ぺたー」

「……」

いつもしがみついたり抱きついたり（偶ニ）（元）撫でてくれる飼い主さんの腕……案外古傷が多いのですね。

色々苦労なさつてゐる腕に、私はゆっくつと薬を塗り込みました。

「…………よし、と。次は頬つぺたです」

「もう塞がつて そんなに薬はいらん。 床せ
「これ位…ですか？」

「そ」

「いきますよー。はい、ぺたー」

「…………お前、遊んでるだろ」

「ぺたー」

「…………」

包帯だらけの手で飼い主さんの顔にぺたぺた触れながら、もう片方の手はゆっくり優しく塗つていきます。

そして私と同じく傷口を塞ぐと、飼い主さんが隣に置いていた桶に浸した手拭いで手を拭いてくれました。

そして今度こそお薬を仕舞い、一人の汚れを落とした桶を猫に渡す飼い主さんの背後で、私は大事に仕舞つていた髪飾りを引っ張り出します。

今日は何処にも行かない（といつが行けない）けど、防具を着ない日は付けていたいのです。本当は毎日付けていたいのですけど……。

「飼い主さん、飼い主さん」

「あー？」

「髪飾り、付けて欲しいのです

「それぐらい自分で……あー…貸せ」

別に付けられない事もないのですけど、飼い主さんは断りずに髪飾りを受け取ると、先程の椅子に座るように言います。

飼い主さんが背後でガタガタ音をたてては数歩歩み寄つて、また戻つたりを何度も繰り返す間、私は足をふらふらして待っていました。

しばらくして飼い主さんは戻ってきた訳ですが、私に何も話しかけずに、まじつけながら髪を梳かします。

最後にしゃりしゃり音がする青い硝子の髪飾りを『ひつひつした手で添えると、「よし、」と小さな声を出して、私に 小さな櫛を、差し出しました。

「これは……？」

木彫りの花 大きく咲いているのが一つ、小さいのが二つ、薔薇が一つ彫られている櫛は、お家には無かつたものです。

「…………ちょうど船待つてたら良い露店があつてな。前に髪飾りを買つた事だし、櫛でもやればけつどいいかなつていうか…順序逆だつたなとか…とにかく今回のお産だ」

「…………」

「…………いらないなら別に……」

黙つて彫られた花をなぞつていると、飼い主さんは小さくわざわざきました。

「……飼い主さん」

「あ、ああ~。」

「……ありがと~、『ゼロこまく』

「……………ああ、うん」

「とても可愛らしくです。…嬉しい」

チエダーさんならもうと上手に、たくさんの言葉で感謝の言葉を言えるのでしようけど、今の私に、これ以上の言葉は思いつかなくて。

「じゃあお礼に、飼い主さんの髪を毎日梳かしてさしあげます」

「え?」

*

一人は交際しておりません。これが本来の一人の生活ぶりです。

5・甘えん坊な性格です（後書き）

オマケ

ちなみに咲ちゃんのラッキースケベタイム時の一人の体勢

咲ちゃん　がばっと起きて振り向いて説教してたら気付かぬ内に夜
ちゃんに少し迫ってた（つまり前のめり）

夜ちゃん　咲が起きる反動で尻餅付いた風になる。後ろに仰け反つ
たせいで胸元ぎりぎり。足も開いた状態なのでぎりぎり。

咲ちゃんが説教に夢中で前のめりに迫っていた際、太腿とか触られ
てたけど全然気にしてなかつた。そのせいで咲ちゃんも反応遅れた。

といひ無茶でありえない体制でした。

6・装備は自分の毛皮です

「あー……」いやあ修理に時間かかるわ

「どれくらいかかりそうだ?」

「一か月過ぎちゃうかも。今、嫁さんの悪阻^{しづ}が酷くな……」

「ああ……心配だよな」

「うわあああ可愛^{かわ}いこと思つて付けた尻尾^{しり}が（ ； ； ； ）」

「……（親父の（ ； ； ； ； ））て顔すげー（気持ち悪い）」

「力作だったのに…………ぐすん…………まあしようがない、折角だしねちょっと大人っぽくする?まだ毛皮余ってんだろ?」

「すっげー余ってる」

「後で持つてこいよ、あと料金はこんなでよろしく」

*

元兎です。

雑誌を読みながら「ん」うなづき、あれから怪我が良くなつた

実は昨日、私のボロボロの装備を修理しに行つたら一ヶ月の時が必要と言われ、丁度いいから新しい防具を買う事になりました。

その時に貰つた「新作・人気の防具ベスト」を帰つてから飼い主さんと読んだのですが……飼い主さんは重そうな防具ばかり選ぶし、私はどうすればいいか分からぬしで選べず、チエダーさんの所へ相談しに来たのです。

飼い主さんはとても嫌そうな顔をしていましたが、私がチエダーさんに憧れていのを知つてるので渋々一緒に付いて来てくれました。

……ちなみに、そのチエダーさんのお家　　所々花が飾つてあたりする可愛らしい家に似つかわしくない、「ラッシャイヤセー！」という猫達の大きな挨拶には一年半経つても慣れません。

しかも遊びに行くと偶に、猫の尋常じゃない悲鳴が聞こえてくるのですが…。あれは何の悲鳴か聞きたいのですけど、答えが怖くて聞けません。

そんな不思議なお家の主であるチエダーさんは、猫に持つて来させたお茶と茶菓子を私達一人に押しやると頬杖をつきながら口を開きました。

「…………それでー？私が選んじゃつて構わないの？」

「…ああ、お互にこうこうのに不向きだからな」

「よろしくお願ひします」

「いいよいよーーめつて可愛いの選んであげるーー。」

「……おこ、見た目より性能の方を「あ、これ可愛いーー。」聞けよ

つ

「……じゃん別にさー。どうせ咲ヶやんがずっと傍にいるんだから、可愛さ重視で良いじゃん」

「こ」の前みたいに別のクヒストに行ってる事だつてあんだけ

「いや、そうじゃなくてさ、どうせ嫁に賣づん…痛いー。」

もともとカリカリしていた飼い主さん、チョダーさんのからかう声に耐えられず「テ」「ピンを……ああでも、テ」「ピンで済ませるだけ（こつもは首絞めますからね）良いのでしょうか。

「……あの、お一人共、これはどうですか？」

「あん？…カボチャ装備は駄目だ。馬鹿みたいだろ」

「馬鹿じゃないです、可愛いのです！」

「魔女っ子夜ちゃん萌えるわー」

「俺はそんな奴の隣を歩きたくねーんだよ」

「(、・・・)」

慎みのあるのにじり、と書いつてお茶を呷る飼い主さんは「月刊狩人暮らし」を読み始めました。

もう知らんとばかりの態度で読まれているページには「子豚拾つたつたwww」というタイトルが書かれています。

「じゃあナルメルはー？大きな羽が可愛いんだよ」

「へー！あれですよね、青緑の綺麗な」

「あれ邪魔だから。却下」

「……じゃあ頑張つてナルガにしてみるー？セクシーだけどね、」

「却下。合わん」

「……私とお揃いのブナハにしてみる？それで一緒に狩りに行くの」

「チエダーさんとお揃いですか！？嬉しいです……私、チエダーさんと姉妹みたいにお揃いの装備を着けるのが夢でして」

「却下。見てて苛々する」

「もしよろしければ」と続けよつとした私の言葉を遮つて、飼い主さんはとてもとても低いお声で淡々と短く言つと、ぱりりとページを捲ります。

次のページは「娘がデキ婚する件……」と見出しがついていました。

「あーもーーー！却下却下つて 私に任せたんなら黙つて雑誌読み耽つてなさいよ！」

「金払うのもこいつとほとんど一緒に狩りに出かけるのも俺だ、任せはするが少しばかり俺の意見を入れて選べよ。……一緒に狩りに行く俺にな」

「何？何で二回言つたの？そんなに姉妹みたいになりたいって夜ちゃんが言つたのが嫌だつたの？……大丈夫、夜ちゃんの事は取らないから。あれだよ、咲ちゃんと一緒に新婚さんに見えるんだから小さい事言わないの。黙つてデキ婚の話でも読んでなさい」

茶菓子を口に入れるチエダーさんの発言の後、飼い主さんが急に咳込んで手に持っていたお茶がテーブルと雑誌に少しだけかかりまし

た。

(飼い主さん、顔真っ赤です……咳のせいで苦しいんでしょ
うか…)

あと「新婚」と「トキ婚」って何なのでしょう?

疑問に思つたのですが飼い主さんの咳が治まらないので聞くのをやめ、飼い主さんの腕中をわすしながら零れたお茶を布巾で拭きました。

その後も似たような事の繰り返しだったのですが、チエダーさん提案のスカラならまあ良いかもという話になり……ちょうどチエダーさんがお持ちだとうので、試しに来させてもらいました。

「可愛いわー！ほんとーに可愛いわー！」

「そ、そうですか？」

「照れる所も可愛いわー！咲ちゃんの所じゃなくてお姉ちゃんとと一緒に住んで欲しいぐらうだわー…」

「えへへ」

「今度お揃いで狩りに行こうねー…」

むぎゅー、と抱きしめてくれるチエダーさんに頷いて飼い主さんの方を見ると、じりじりと上から下まで睨まれました…。

ですが何も言わずに本を開じると、チエダーサンに「次の連続狩猟、お前ら一人来れるか」とだけ言いました。

「私は空いてるけど、スウェーツは知らない」「いつも一緒なのにですか…？」
「んー、私が誘う時はいつも『空いてるからいいよ』って言うんだよねー。結構気まぐれに誘つてるんだけど」「…………わっせとくつつけよリア充」「何か言つたー？」
「いや」

ぼそっと呟く飼い主さんに一人で首を傾げると、飼い主さんは咳払いして続けました。

「…」いつにはまだ連續狩猟は難しい上に怪我が治ったばかりだからな。あまり無茶をするのも良くないだろうから、四人でさつさと倒したいんだが」「咲ちゃんって本当に過保護だよね。チエダーサンたまに苦笑いしちゃいそう」「うつせーな。とにかく来れるのか来ないのかどっちだ」「熱い所じゃなきやいいよー」「…じゃあ渓流か孤島か　　孤島にするか」「どうしてですか？」
「二匹相手にするか一匹相手にするかなら後者だろ」「お前はまだ一対一の状況で狩りをしたほうがいいからな。と言つて私のずれた帽子をぽんぽん叩くと、「着替えて来い」とチエダーさ

んからばっつと剥がされて奥の部屋に背を押されました。

*

「す、すすす、すい、すいまつ…せん…クエ、くええ、くえ…」
「なんで鳥の鳴き真似をしてるんだお前は」
「ふふふ、夜ちゃんお久しぶりですね。今日は何のクエストで?」
「れん、ぞく。しゅ…りょうです」
「はいはい。連続狩獵の?」
「あの…あの…咲ちゃん! (、 ; ; ;)」
「……これで」
「ふふ、了解しました。…お一人ですか?」
「いや、四人で」
「……え、あの、下位クエストですよ…?」
「速攻で終わらせたくて」
「……(、 ; ; ;)」
「夜、背中に引っづくのも泣ぐのも止められない前の方
インを入れる」
「夜ちゃん大丈夫ですよー、怖くないですよー」

恐る恐る飼い主さんから離れてそろそろ「トサインを入れて元兎です。おはよーい」といいます。

今日はスカラ 装備を手に入れる為、連続狩猟のクエストを頼もうとしたのですが……受付のお姉さん、とても優しい方なんですが、人慣れしていない私には怖く思えてしょうがないのです。『ごめんなさい…』

「…………しつかし……」Jの程度のクエストでその装備とか……「虜めじやないですか」

「常に全力なんで」

「それでも四人はちょっと…」

スタンプを弄りながら渋る受付のお姉さんと、変わらずに「常に全力なんで」を繰り返す飼い主さん。

その背後にぴつたりくついた私が飼い主さんの腰の装備を弄つていふと、小さな声でお姉さんに呴きました。

「…………最近のモンスターが異常なのはアンタも聞いてるだろ？」

「え、ええ……異様に凶暴だとか大きいとか あ、もしかしてその調査」

「不安定な狩り場にこの馬鹿（前科持ち）を連れていけないし」

「…………過保護ですよね、咲さん…」

ああもういいですよ。はいはい受理しました、とぺたんとスタンプを押すとお姉さんはちゅうっと顔を出していた私に「気をつけるんだよー?」と微笑みかけると、クエスト注文票を手に奥に下がつ

てしましました。

「おはようございます、スカイーシ�ん、チヒダースさん」

「本当に来たな」

出口前でお一人を待つて十分後、お揃いの装備でこちらに向かってく（いいなあ…）チヒダーさんとスカイーツさんが来られました。

「何だよ咲、『本当に来たな』って」

「……………」

わざわざと行げど、と頭装備を被りながらネコタクに乗る飼い主さんに首を傾げるスカイーツさんでしたが、特に追求する気はないのかチヒダーさんの隣に乗り込みました。

私は飼い主さんの隣ではなく、後ろです。だって今の飼い主さんは、飼い主さんは……！

「おこ黒、背中に引つづくなつて這つてんだろ」

「…ひつー。」

「ナルガ君、大好きな兔ちゃんに怖がられてるけどー？」

「つづせーなッ」

「怖いもんな、分かる分かる」

「黙れ工セ貴族」

「エセ貴族つて言われた！？」

虫野郎よりはいいんぢやないの」

どうとも思つていなゝ声のチエダ－さんの後ろに隠れようとしたら、
飼い主さんに無理矢理引っ張られ、飼い主さんの うわああ
ああん怖いいいい！！

「怖いか、黒」

「はいだからこりち向かないで下さい！ナルガには黒、猫パンチを連打されて追いやられた事があるのでアーラウマなのです！」

「……あ、見ない分には耐えられ…覗きこまないで下さい

!

「要らなしな?」

しつこく顔を上げさせようとしてくる飼い主さんにそう呟ぶと、私は今度こそチエダーハンに抱きつきました。良い匂このするチエダーハンにしがみついて、飼い主さんの怖い匂いを忘れようと堅く目を瞑つたら、チエダーハンが優しく撫でてくれました(・・・)

その隣でチラチラと此方を見ていた（そんな視線がしました）スウェーツさんが私達二人に小さな焼き菓子をくれました……あれ、クリストに関係の無いもの持つて来ちゃいけないって、飼い主さんが

……。

「……お前、ただの菓子からチーズ菓子になつたな」

「えつ」

「後で覚えておけよ」

「何で！？」

飼い主さんとスウィーツさん、少し似てるお一人なのに
つと、仲悪いですよね……。

ちよ

*

新装備候補の中で、一番着て欲しくないものがナルガ装備だつた飼
い主さん。

6・装備は自分の毛皮です（後書き）

オマケ（チヒダー先輩による後輩の誘い方）

「御主人、明日はどうするのニヤ？」

「明日は洗濯を一気にやつちやつて、庭弄りするか。家の掃除は任せた」

「勿論だニヤー！……ニヤ？」

「　　おーい、スヴィーツー」

「あー？」

「明日さ、皆で狩」

「行く」

「御主人！？」

「そ。クエストはこれだつて。じゃ、」

「あ、……待て」

「そうですよ待つて下さい！御主人ツ洗濯とかビツす
「なにー？」

「これから暇か？暇だつたら夕飯食べていかないか？」

「御主人！御主人、あたしの話聞いてく」

「いーの一？…じゃ、お言葉に甘えて　　」

「クソアマがあああ！！あたしと旦那の仲を裂こうとすんじやないよおおおー！」

「ちょ、この猫蹴つてくるんだけど」

「…シヨコラ、クビにされたくなかったりどつか行つてくれ
「！」御主人！？」

「あと四日、俺の代わつてお前りでせつとこてくれな。じや
「うふ……じゅじゅじ……んー。」

……………といつ、最低な男がいたらしいです。

7・特技は採集、水泳です

「――ヤー！車輪の部分が壊れちゃったの――ヤー！やけに不安定だと
は思つてたけど……あーもーボロいのはこれだから駄目――！」
「あんなに揺れたの初めてです　　いっぱい揺れて、楽しかった
ですね」

「夜は意外にじゅじゅ馬だつたんだな。これが楽しいとか…」

「スウェーツさんは楽しくなかつたですか？　あの、飼い主さんは
……飼い主、さんは…」

「…………（咲の背中から、人を何人か殺してきたかのような霸気が
…）」

「…………」「――ヤー……咲さん、申し訳ないけど、ちょっと待つてて欲しい
の――ヤー」

「…………」

「…………」「めんなさい、――ヤ」

「…………」

「…………」

飼い主さんの背中にぐつつきながらこにちは、元兎の夜
です。

あれから飼い主さんは無言で少しばかりナルガつていたのですが、
今の（不機嫌さからくる）あまりのナルガつぶり（怒氣といつか何
といつか）にネコタクの猫も怯えています……。

「い、今、修理するから……待つてほし……ださこませ、一や……」
「……」

飼い主さんは待つのが嫌いな方だから、口にはしないけど態度に出るのです。空気が非常に重苦しいのです。

ですがその空氣（思えばあの激しい揺れも）を物ともせず、チエダさんは荷物と腕を枕に器用に寝ています。

肩を貸すかとチエダーさんに声をかけていたスウィーツさんは何処から引っ張り出したのか、何度も石を投げて（多分ペイントボールの）練習をしていました。

「あ、セツ一ヤー……近くに綺麗な滝がある一ヤ、見に行つたら如何ですかニヤー？その間に僕が直しておくれニヤつ」
「……」

「あ、俺はいいや。チエダー起こすのもアレだし」

「……」「……」
「……」「……」

尻尾の毛が逆立つてしまつている猫が、助けを求めるように私を見るので、思わず、「見たいです」と飼い主さんの装備を引っ張つて強請りました。

引っ張る手がびくびくしていたのはきっと、飼い主さんにもバレてる事でしょう……一向に振り向かない飼い主さんの代わりに、スウィーツさんは何故か投げた石を急カーブさせながら了承してくれました。

「ああ、じゃあ言つといで。俺がチエダーと荷物、見とくから」

「「、「めんなさい……」」

「いや、別に良いんだ 哎、連れてつてやれよ」

「……」

「ひつ

振り返った時の飼い主さんの顔（ナルガ頭装備）が恐ろしくて、変な声が口から弾けるように飛び出でしました。

奇声を上げる私に降りるようにジエスチャ―した（それもそれで怖かつたです）飼い主さんは無言で太刀を引っ張り出すと、軽やかにネコタクから降ります。

「あ、私の

「

「此処は危険なモンスターが出ないから大丈夫だ。何かあつても咲がすぐ終わらせるさ……ト位クエストだし」

「……」

ぼそっと弦くスウィーツさんを睨みつけますが、飼い主さんは一言も発しません それってかなり機嫌が最悪ですよね、一人で滝を見に行くの、よくなかつたんじや……。

「か、飼い主さん、あの、私、そこまで滝を見た

「行くぞ」

「はー……」

やけに早足な飼い主さんの背中を見失わないよつて、私は滝に続く道を下りました……。

何度も背後にあるネコタクを振り返ると、ペコペコ頭を下げる猫さんと、相変わらず寝ているチエダーサン、間違つて道祖神様に石を当ててしまつたスウェーツさんが見えて思わず、走つて引き返しましたが、途中で飼い主さんに強く手を引かれました。

いつもは何かの弾みでスルッと解けてしまいそうな程軽く握りしめるのに、今回は切羽詰まつたというか、耐えるようにきつく握りしめるし、雰囲気が恐ろしいで泣いてしまいました……。

ちなみにその雰囲気の怖さは…「お呼びかね?」とひょっこり顔を出したモンスターがパツと何処かに消えていく程です。

() な、何か…お気に触ること、しましたか…?

クエストの注文も一人で出来ない子だから苛々させたのでしょうか?ナルガ装備にビクつく情けない子だから、呆れてしまつたとか…

…ちょ、飼い主さん早いです、早すぎま

あつ

不意に、飼い主さんの身体が傾き(この時まで、私は飼い主さんが躓いたのだと思っていました)、慌てて引っ張りうとした私ですが、当然飼い主さんの身体を支える事は出来ず……数歩、よろめいた所で、草の中。を越えて、

(落ちてゐる…?)

あまりの事に声が出ず、何も考えられなかつた私がガクンと宙に留まられたのは、とつそに崖に生えていた木の枝を掴んだ飼い主さんのおかげです。

遠くでパシャンと飼い主さんの頭装備と太刀が落ちる音が耳を打ちましたが、私の全ては飼い主さんの顔に注がれていました
だって、
…

「…か、いぬし、さん。顔…真っ白です…」
「…つたんだよ」

「え?」

「何でもない…下手に動くな」

そうは言われても、風のせいでブンブンと私の身体は振り子時計のようになつてているのですが…。

「飼い主さん…」

「…大丈夫だ、夜」

軋む木の音に私が青褪め、縋るように飼い主さんの名前を呼びますと、飼い主さんは努めて落ち着いた声で、空元気な優しい声で私の名前を呼びました。

飼い主さんは私がパニックに陥りそうになつたり、ただただ私が泣きじやくる時は決まってこの声で私の名前を呼ぶのです 「黒」ではなく、「夜」と。

力むせいか白かつた飼い主さんの頬に朱が浮かび、どうしようもないなくて腕が震えても、飼い主さんは精一杯の虚勢を張つてくれていました。

「飼い主さん、私の事、離しても、構わないのです」

「馬鹿ッ何勝手に諦めてるんだ！」

「私なら大丈夫なのですよ。私が手を離せば、飼い主さんはきっと無事に上がれます」

「ふざけんな ……ッ」

「ほら、手が…」

「つかねーーー！」

木の尖つた部分に手を刺してしまつたのか、飼い主さんの腕に赤い霧が伝つているのが見えます。

それでも飼い主さんは腕を緩めてくれなくて。木が嫌な音を立てても、熱くて痛い手の温度は変わらずそこにありました。

「飼い主さん、
「絶対、離す
」

か。と続くのでしょ「言葉は、下に落ちたせいで聞こえませんでし

た。

「黒つー!?

ボキリと折れた木の残った部分に何とかしがみつけた飼い主さんですが、一瞬だけ腕の力が緩んでしまったのです。

私としてはこれでいいわけだ 先程まではガクブルしてました
が、腹をくくつてしまえば心臓が痛いぐらいで済みます。

(ハンマー…持つて来なくて良かつた)

持つても何の得にもなりませんし。双剣の方が役に立つたかも…あれ?

(飼い主さん!?)

何である人 落ちてるんですか!?

あのままなら無事に上がれたではないですか!私としてはそのまま
上がつて迎えに来て欲しかったのですが。

ぽけーっと飼い主さんを見れば、飼い主さんは風圧に負けじと手を
伸ばそうとしていました。

これは手を伸ばすべきなのだろうかと思つた頃には水面が迫つて來
た、なんて確認する時にはもう水の中。ちょっと痛い入り
方をしてしまいましたが、まあしょうがないです。

私は鬼の頃を思い出して水中でぐるんと回り、近場の岩に足を着く

と、水泡に埋もれるよつて沈む飼い主さんの所に跳ねました。

私は軽やかな装備というか生地だつたのでこんな簡単に動けましたが、飼い主さんは重い装備な訳でものすごくもがいています。

(飼い主さん…そんな風に動いたら攀つかけやいますよ…)

沈む身体に手を伸ばし、堅く瞑つた目に指を這わせんはそつと、青い世界で目を開きました。 飼い主さん

そして私の指に触れて、ぼこり、と何かを咳きます。

(何を…いえ、そんな事より上がらないと)

飼い主さんの頭を胸にじっかりと抱いて、兎の頃とは勝手が違つ浮上の仕方でしたが、何とか無事に生還しました。

滝の激しい音に耳がやられそうなので、ゆきくじゆきく離れます。

耳も身体も落ち着いた所で、飼い主さんは大丈夫かと見ればゆつくりと頭を左右に あ、水滴を払おうと頭を振、……うつとして、固まりました。

(…………ん? ああ、飼い主さんの頭、抱いたままだ)

そりゃあ水滴払えませんよね、と離れよつとしたら、何故か飼い主さんが自分から離れて沈み始めました。

勿論、吃驚した私が救助しましたけどね。

*

インナー姿でも「じめん」潜り続け、やっと飼い主さんの太刀を見つけました。

頭の装備はもう見つけたのですけど、中々太刀が見つからなくて困っていたのです。

(でも、飼い主さん、可愛らしくのです)

探しに行くと言った時の飼い主さんの顔、気まずそうな顔だったのが、「じめん」と謝つてから、恥ずかしそうに、小さな声で「泳げないんだ」、なんて。

飼い主さんに出来ない事なんて無いと思つていたからとても新鮮で、ちょっと安心しました。

「……ふ、はあ…」

水中から頭を出して、ブンブンと頭を振つていると飼い主さんが遠くから私を呼んでいます。

返事の代わりに飼い主さんの太刀を持ち上げて見せれば、いいから上がつて来いと返されました。

見れば飼い主さんの近くに焚き火があつて、その前には防具が一式と飼い主さんの頭と上半身の装備が置かれています。

私は目を向けてばかりで火に当たつていらない飼い主さんの為にも、私は急いで泳ぎます　　と、水中に美味しそうな魚が。

(飼い主さん、喜ぶかな…?)

太刀を先へ流し、ひょいつと潜つて胸に挟んだ剥ぎ取りナイフ(念の為に入れて泳いだのです)を抜きますと、スピードを上げて近づいてグサリと一突き。

飼い主さん、今はだいぶ顔色も良くなりましたが……念の為にも、精をつけて頂かないと。

(あ、この石、綺麗なのです)

ついでに拾つた鉱石の欠片を胸に入れて、私は太刀の陰に向かつて上昇しました。

やつと太刀に手が届いて、ザバッと顔を出せば岸がもう近くで、…飼い主さんが近くにいました。何故か水の中に胴から下を入れて

此方に歩み寄ってきます。

「黒ツ 急に潜るな、心配するだろ」がーーー」

「いゝごめんなさい…」

「早く上がれ、風邪引くぞ

太刀寄こせ

「はー……」

やつぱりシンシンしたままの飼い主さん。私の手から太刀を受け取るや装備の近くに放り投げ、私に手を伸ばします。それに私がそつと手を伸ばせば、今度はあの時と違つて強いけど優しく、痛くないよう引つ張つてくれて。私が上がりきると、急いで火に当たれと背中を押します。

押して 私の片腕、剥ぎ取りナイフに刺されて死んでいる魚に
気付きました。

「……何だ、これ

「お腹の足しにして貰おうと…あと…」

「ちょ、馬鹿ツなんつーことに手を

あん?」

「落ちてたので」

「マカライトか 小さいが上質だな

「差し上げます」

「お前が採つたんだからお前のだ。…ほら、さっさと火に当たれ

「……(、・・・)」

しょんぼりと火に近づく私の傍で、飼い主さんは魚からナイフを引き抜いて鱗を落とし始めました。

何だかその背中が寒そうだったので、失敗したかなと
と申し訳ないので、温めて差し上げようと、

「おー、調理中だから近づくな

「……はー(、・・・)」

近づけたりしたら止められました。…私、する事ないです。

しうがないので一度いい太さの木を探し、手でいい形に折って水
に付けて洗い、軽く火に焙りました。木を探しに行く途中で茸（ち
やん）と食用ですよー）とかを見つけたので採集して一緒に洗いまし
た。

真つ赤な実の野苺を綺麗に洗つて、同じく綺麗に洗つた葉っぱの上
に盛ると、茸を木の枝に刺して焙ります。

「おま……何処から拾つてきた?」

「あそこですよ」

「……お前つて採集得意だよな」

「兎の頃となんら変わりませんからねえ…」

加工した魚に枝を刺して焼き始めた飼い主さんに一度いい塩梅の茸
を差し出すと、すごくガン見されました。信用されてないのでしょ
うか…(、・・・)

「食えるのか?」

「兎の頃、たんと食べてましたよ……その度にナルガに虜められましたが」

「何で凍土から孤島に出ててんだよ」

「食料が無くて（、：：：）」

「切実だな……あ、甘い」

私がもしゃもしゃ食べたことに釣られたのか、飼い主さんも恐る恐る口に入れてくれました。

「凍土からこここまで来るとか、身体は平氣なのか
「色んな子に虜められました…」

「それは何か想像できるんだが、そうじやなくて 気温の変化
とか、…知らない土地での食料の見分け方とかどうしたんだ
「ペッ♪歸匠が教えてくれました…唯一私に優しく接してくれた子
です」

「師匠つてお前……」

「……でも、ペッ♪歸匠はだいぶ世間に亡くなられました…ぐすつ

…」

「……狩られたのか

「いえ、死因は食中毒です」

「ぶ つ！！！」

「か、飼い主さん！…？」

思いつきり呑た飼い主さんに慌てると、急に草を火にくべました。
草さ ん！…（、：：：）

「殺す気か！…？」

「ち、違います、ペッ♪師匠は木の実を食べたのです。草は山菜

のお爺さんも大丈夫って言つてましたから、安心して下さること

「本当だな……？」

私が何度も「クククと頷くのも疑いの田で見るので、私は黙つて食べかけの茸を頬張つて飲み込みました。

「ね？」

「遅行性かもしけない……」

「じゃ、じゃあ、茸はいいですかからお魚を食べて下さいな。野苺もあります……」

しょぼんとした声で進めると、飼い主さんはしばらく無言でややあってから、野苺に手を伸ばしてくれました。
匂い、形、色と見てから口に入れた飼い主さんは、凍土から孤島に行くまでの「気温の変化」について尋ねてきました。

「そうですねえ、ちょっと暑いなーとは思いましたよ？

「それだけか」

「耐えられなかつたらさぶーんと水に飛び込めばいいのです。わっべきみたいに

「……もしかしてお前、兎の頃から……？」

「あれぐらいの塵、全然怖くないのですー！」

むしろ後ろから突いてきたナルガさんが怖かったです……特に
田が。

「泳げる兎つて… つーかお前、ナルガとやり合つたことあるのか?」

「最初は遊んでくれるのかなって……『死ねテブ』って吐き捨てられました(、 ; ; ;)」

「デブ……」

「ケルビと仲良くなったら田の前でその子を食べるし…… ドスファン「コと同じ匂いがしました」

「苛めつ子の?」

「はい」

仲良くしたかったのに一方的に私を追い立てるのです……と鼻を啜ると、飼い主さんは魚を千切りながら「亞種同士なのにか……」と呟かれました。

「う?」「

「いや、亞種同士なら仲が良いかと思つたんだがな」

「……私だつて、猫パンチされて尻尾で殴られて崖から落とされなければ仲良くしていました」

「よく生きてたな」

「紫色の子に助けられたのですよ　　え?」

すいつと皿の前に突き付けられた、齧られた跡があるお魚（上手に焼けましたーー）……これはもしや、食えという事なのですか…。

「お魚嫌いです」

「身体に悪いぞ」

「草食べてるから平氣なのです」

「いや、そうじゃなくて。もう少し肉を付けんと

」「

不意に飼い主さんの姿と声が掠れて、途切れ、目をパチパチとしたら元に戻りました。

「黒？」

飼い主さんはほんの一秒三秒の私の変化に気付いてしまつたらしく、魚を引っ込めて私の隣に腰掛けます。

「顔赤い…のは火に当たってるからだと思つたんだが…おい、気分は？」

「…分からないです？」

「気分が分からないうてどうこいつ事だよ　　吐き気とかは？」

頭痛いとか、どうなんだ？と顔を覗きこむ飼い主さんの顔は心配げで。じーっと見ていたらやつぱり視界が霞んできてる。

飼い主さんの顔がしつかり見えない事が何だか恐ろしくて、私はするすると飼い主さんに近づきました。

少し痛んだ髪、怖く見えるけど、とても優しい目。整つている何もかも。

……少しカサついた、脣。

(割れそう…)

割れたら痛いし、何かで湿らせませんと。
飼い主さんの面倒

そう思つた私は、

*
夜ちゃんのファーストキスが
！の、巻。

7・特技は採集、水泳です（後書き）

オマケ：

咲ちゃんは力ナゾチで車酔いしやすい子です。船は平氣なんだけどね！

夜の前では「強い飼い主さん」でいたいので、具合の悪さを出さず耐えていたら「怖い」とか色々と夜に思われるところ……。夜が泳げる子で助かったけど、男のプライド的にちょっと微妙な咲ちゃんでした。

8・兎ですから、寂しいのは駄目なのです（前書き）

「ほのぼの」の予定だったのに、「鬱^{シリアルス}」が急遽入ることになりました。

和みに来た方、本当に申し訳ありませんが、これからも「J漫誌していただければ幸いです。

8・兎ですから、寂しいのは駄目なのです

「よ
」

る、とこのつ瓶が、皿の前の唇から出る事もなく。

飼い主さんの唇の端に触れようと……いや、触れたのかな……そんなふにゃふにゃした感覚で、私はゆっくり皿を閉じるのです。

飼い主さんはもう何も言わず、私の肩に乗せていた手を、そつと髪に指して。やがて頬に触れて……

パンツ

とこう破裂音に私がびくっと跳ねた瞬間、飼い主さんはハツとした顔で私を突き飛ばしました……痛いのです……（、・・・）

「おいおいおい、人に火竜の世話をせいで、テメーは可愛いおんこやのことによんによんしようつてか？いい御身分だよねえ……咲ちゃんよお？」「

銃口から出る煙を吹き消すと、チエダーさんは座り込む私に手を伸ばしてくれました。

見上げると、そのお顔はとても……殺氣立つて。私は恐る恐るその手をとつて立ち上がるうとしたら　そのまま後ろにすとん、と。

「咲……薬でも盛ったの？……下ト種が」

「ち、違うー！そいつが勝手に……何かよく分からん茸を食つてたせいだろ！」

「茸……え、これ食べさせたの？」

まだ火に焙つていらない茸を拾い上げて上下左右に覗きこむと、チエダーさんはすぐにポーチを探り始めました。

「……これ、胡散臭い惚れ薬とかの闇商品に主に使われる茸だけど」「闇商品…？」

「知らなくても不思議じゃあないんだけど…とりあえず、この茸を食べると夢見気分になるっていうか、思考が鈍るっていうか」「黒ツコレバリバリ毒茸だらうが！？」

「うー？」

「よじよじ、夜ちゃん良い子だからこの解毒薬飲んでねー？」

ちょっと苦いけど我慢するんだぞ　~と渡された青い薬と、チエダーサンの綺麗な微笑に見惚れて、そのまま黙つてぼんやりとお薬を持つていました。

綺麗な銀の髪が葉の合間から零れる光りに優しく照らされ、とても綺麗で。私では出来ない美しさが羨ましくて。

複雑で苦しい胸を抱きしめて疑問に思つていると、チエダーサンのいつものふびりとした声がやつと聞けました。

「いやー良かつた良かつた。咲ちゃんが何も知らない無垢な子兎を手籠めにするのかと思って、お姉さん焦っちゃった。」

「大変不名誉極まりないが……あの時氣を殺いでくれたこと、感謝する」

「…………え、それって」

「…………きっと、俺も一口食つたからだと思つ。きっとやうだらうから何も言つな」

「ケダモノよー！兎さんをぱくつとぱりつと食い散らかそつとする狼よー！」

「つるせええええーー！」

……叫ぶ飼い主さんとからかうチエダーサンといういつもの光景に何だかほつこり のはずが、何故か今田は寂しくて。

あの時、髪を梳いた手は優しくて、頬に触れた手は熱かった。確かにそうだったのに、今にも忘れてしまいそうな怖さが、お一人を見れば見るほど胸を突いてきます。

しかも私がオロオロと見ている前で、チエダーサンは飼い主さんの肩に腕を伸ばし、そつと顔を近づけて囁きました。

「しかもさー、女の子に乳首見せるつてびりこりこりとよー

…「Jの露出狂が。夜ちゃんが恥ずかしがって照れちゃつたりする初
な反応にニヤニヤしてたんでしょう?それとも『俺の体、美しいだろ
う?』って言いたかったの?キモいんだけど。キモイ越えて死んで
欲しいんだけど

「んなわけねーだろおがツ上装備付けたままだと擦れて痛かつたか
ら…」

「え、乳首が?」

「乳首から離れる痴女が!!」

「私はスワイーツ限定の痴女ですー!」

「痴女つて事は認めんのかよー?」

…………。

……飼い主さん、私が抱きつくと怒るの。

……それにいつもいつも思つてたのですけど。飼い主さんはチエダ一
さんと一緒にいると、とても賑やかなのです。普段は無口なのに。
なんでかな。どうしてかな…?

飼い主さん、飼い主さん…兎の事も構つて下さいな。見て下さいな。

……ああもう、寂しい。

(ああそつだ、寂しいのなら)

そつと、優しく、一瞬で。

「く…る…!?

飼い主さんの、傷だらけの身体を。

*

「な、ななななななな……ッ！？」

「可愛いー！抱きついたまま寝ちゃつたー！」

「いやいやいや、引っ剥がしてくれ！今すぐ！…」

「えー…勿体な…ああ、「

「は？」

「今夜ちゃん下着姿だもんね。柔らかいのとか眼福とかもうもうバーンだよね？」

「ごめん何言つてるのか分からない」

「下、ちゃんと見て！」覧よ。谷間

「死ねええええ！」

「はいはい、冗談冗談メンゴって…でもせ、

「あん？」

「これは冗談抜きな話だけど、咲つて」

「…何」「…んー、どうしようかなあ…」

「おい、言えよ。なんか気になるだろ」「えー、だつてさ、後で恨まれたくないし」

「お前は何を言おうとしたんだよ…」

「咲ちゃんが一年前からずっと、見ないふりをしてきた」と

「はあ？」

「だからセー……うーん、人間不信の咲が絆されてる」と云つて、
つていつか

「…………」

「夜ちゃんは本当に「良い子」だもんねえ。保護者は面倒臭いとか
言つておきながら、何だかんだ言つて箱入り娘に育てるのも分か
るよ。大事にしたらしだけ懐いてくれる夜ちゃんはヤバ可愛らし
い事でしょうなあ？」

「…………」

「や、そんな顔しないでよ。私は別にちょっと怪んでる君の教育方
針というか縛り方に口を出す気はない。内心ビビつあれ、君は夜ち
ゃんの自立を促そうとはしてるし」

「…………」

「私が言いたいことはただ一つだ」

「…………何だ」

「…………頼りになる親御さんを夜ちゃんの前では氣取つておきな
がら、実は裏で紫の上計画を着々とこなすなんて、君は本当にエエ
NTA』だな！」

「…………」

「むづつづーー口づ「一ーンー」

「…………」

「すけベーー……あれ、なんで首傾げてんの…………？」

「…………」

「…………？」

「……俺 紫の上計画…してるか?」

「えつ」

「じつちが『えつ』って言いたいんだが……あと俺、そんなに甘やかしてたか……?」

「ちょ、嘘 WWW深読みしたつた WWW早まつたつた WWW」

「はあ?」

「だつてさ、咲ちゃんつて、「

君の耳元にそつと、爆弾を落としてやれ!

*

『やーー草つぱ兔! お前が食つてた草 WWWズタボロにしといたから

WWW』

『ちょ、じつち来んなし。人間に見つかって狩られるだろ、どっか行け』

『いえーい WWW水 WWW飲んでる WWWお前に WWWドーン WWWWW』

『汚ねえんだよ、お前の毛の色。おかしいだろ、凍土で真っ黒な毛並みつて。迷惑だからお前は洞窟の奥に一生引っ込んでろ。毒吐き

野郎と仲良くしてろよな。ていうか死ね』

『人間にww襲われてるwwwお前にwwwドーンwww』

『てめ、此処を何処だと思つてんだ。此処は雪ン子が来る所じゃねーんだよ、畜生が』

『こんな所で寝てるww危機感の無いお前にwwwドーンwww』

『川で泳いでシェイプアップしろよピザデブ』

『お前を苛めてた兎wwwハンターに突っ込んでつてwww撃たれて死んでたよwwwざまあwww自業自得www』

『何で雪ン子のくせに泳ぐの上手いんだよ。マジで死ね。鍋にされて死ね』

『ハンターと遊ぶとかwwwキチガイすぎwwwあいつらwwwすつごく危険だからwwwお前の事狩る気マンマンだからwww……行かない方がいいって…』

「んん……もう、何も怖くない……」

「……黒、死亡旗を夢の中で立てるな。わざと起きた」

「……葉っぱ踏まないで……」

「……おい」

「ん……はんたーさんは……いひひと……」わいナビ

「……夜」

「ちよっとー！スープ冷めちゃつから夜ぢゃんにときめいてないで
せつせと起こす！」そつと名前を呼ぶぐらいならさつきり呼ぶ！十
秒以内に起こさないと咲ちゃんのだけ土入れるよー。」

「……地獄耳が」

「あん？……やべ、土が」

「おい！？」

「み、っ」

耳元で急に呼ばれた元兎の夜です。こん……こんばんは？で
しゃうか…。

真っ暗な……キャンプのベッドの上で、私は一人丸まっていたよう
です。

「あ、夜ちゃん起きたー？」

「は、はい……あの、此処、何で私、寝て……？」

「ありやりや、覚えてない感じ？……咲ちゃんよかつたねー！」

「……飼い主さん？」

「……」

からかい声のチエダーさんの言葉の意味が分からなくて、私は傍で
膝をついていた飼い主さんを見上げます。

だけど飼いさんは答えないどころか此方を見ててくれなくて。私が
不安になつてもう一度読んだら、短く「飯だから起きろ」とだけ言
つて、キャンプから出でていきました。

「飼い主さん……？」

「あ……夜ちゃん、ひとり『』飯にじよー？」

「でも……」

「……こつまでめそめそしてんだスウェイーツ野郎。わざわざ食つぞ」

「……食べたくない……」

「ちょっとー、『』飯時くらいは明るくしてよ

「…………チツ」

(……こつもなら、私がキャンプから出るのを、待つててくれるの(?)

向こうと違つて静かなキャンプのベッドの上で、私は不思議に思つて首を傾げました。

再度の呼びかけにそろそろと飼い主さんの隣に近づくと、飼い主さんは何も言わずにスープを俯いているスウェイーツさんに手渡していくやつぱり私を見てくれないので。

「はい、夜ちゃんの」
「……ありがとうございます」
「階いつたねー?…じゃ、いただきまーす」
「……」
「……」
「……」
「……」
「あらまあ声を揃えちゃつて」
「こつもそうなので…ね、飼い主さん?」
「……ああ」

窓つよつて飼い主さんに振れば、飼い主さんはスープに皿を落として氣の乗らない声を

……本当に、私、何かしたのでしょうか?

「……あの、どうされたんですか？」

「……」

「さつきから……」

「……」

「……え…と、スウェーツさん、俯いてて……」

思い切つて直球に聞こうとして、飼い主さんから発される重圧に負けて、一番目に気になつた事に話を切り替えます。切り替えたら少しは空気が軽くなつたのですけど、やつぱり飼い主さんはこちらを見てくれなくて。

苦しい沈黙を破つたのは チェダーさんが雑に火に木を突っ込み、火花が飼い主さんへと散つたせいであげた、飼い主さんの舌打ちなのか声にならない悲鳴なのか分からない声でした。

「スウェーツはねー、自分の力不足に嘆いてるの」

「力不足…？」

「そ。火竜を倒した隙にね、ドスジャギイに猫が攫われちゃつて。様子見したら猫は見当たらなくてね、明け方になつたら討伐しに行こうつて事で話が纏まつたの」

「はあ…」

「……俺が相手をしている間に、お前はチェダーと東の方を探しておけ。猫を見つけたら笛を吹け」

「あ……」

まだピリピリしたのが残つているけれど、やつと私の方を見て話しかけてくれた飼い主さんにぶわっと涙が零れそうになり きっ

と変な顔をしているだらう私の表情に、飼い主さんが何故か唇を噛みました。

飼い主さんがポンポンと私の頭を叩くのに思わずふにやりと安堵して、笑つてしまつて。

急に温もりが戻つてきたような、味覚が戻つてきたような気がして、私は飼い主さんに「美味しいですね、」と笑いかけました。

「…そ、うか」

「このスープの火加減、私がしたんだよー！美味しい？スワイーツも美味しいー？」

「火の加減見たぐらいで威張るな」

「えー、大変だつたんだよ、加減見るの。ねー？」

「はい。難しいです」

「お前と黒は違うだろうが。何年一人で暮らしてんだよ」

「ナ・イ・シ・ヨ」

「うぜえ」

「ひつどーい…あ、スワイーツ、口についてるよ」

「ん、ありがと」

「……黒、残さず食べよ」

「は、はいっ」

その言葉に急いで口に入れたら　　なんと、小さく切られたお肉が……！思わず戻しそうになつて、でも思い留まつとして。…結局咽てしまつた私に、チエダーさんが慌ててお茶を入れるのが見えました。

スワイーツさんがのろのろと顔を上げた頃には、飼い主さんはゆつくりと背中を擦つてくれました……飼い主さんの手、とても温かい

のです…。

少しづつ治まつた所で、チエダーさんが良い香りのするお茶を渡してくれて、小声でお礼を言って少しづつお茶を飲みました。

「まだ解毒薬が上手く効いてないのかもな」

「んー… さうかも あ、スウェーツ君つたり盛つてくれるので？」

「ありがとう」

「いや…… 一人は？」

「じゃあよろしく」

「ん」

「黒、もつ半分は食べれるか？」

私がふるふると頭を横に振ると、飼い主さんは珍しそうかと言つて自分の茶碗を受け取ります。…いつもなら「返事なんてどうでもいいんだけどな」とか言つて盛つてしまつたのに。

でも折角飼い主さんの機嫌がちょっとだけ治つたというか、良くなつたのに下手にせつづいてさつきみたいになるのはごめんです。… 黙つておるのが吉、でしょうか……。

(……あ、)

ふと、飼い主さんの指先が喉元をゆっくり擦つているのが見えました 飼い主さんがこれをする時は、大抵は喉が渴いている時なのです！

「飼い主さん」

私は名譽挽回と飼い主さんの「腕に触れて、「お茶は如何ですか？」と湯呑を見せて。

数秒の間に飼い主さんが固まつたかと思つと、ドンドンと後ろに、突き飛ばされてしまいました。

「か……い、ぬし……さん……？」

お茶碗も湯呑も辺りに散らばつてしまつたけど、そんなのに皿を向ける事もなく私は飼い主さんを見上げました。

私は飼い主さんに突き飛ばされた事なんて……クエスト中に避けさせようとする為だと、私の不注意や飼い主さんの事故のせいだといつ位しか無くて。

こんな風に、平時に、意図して突き飛ばされた事なんて無くて。

(き、らわれた……！嫌われた嫌われたつ……どうしよう
！？)

いつも、一の腕に触れてた。うつん、腕にべったりくっついていた。それでも飼い主さんは怒りもしなかつたし止めもしなかつた。偶に頭だつて撫でてくれた。だから不快な行為じゃないと思つていた

……じゃあ何が、気に食わなかつたのでしょうか？

(の、飲みかけのお茶ですか？でも飼い主さんは特に……ここまで怒

つた事なんて、なかつたのです……そつ、こんな……）

多分、呆然と大きく目を開いた私の両の目から、ぼたりと涙が零れて。

飼い主さんは視界が揺らいでよく見えなかつたけれど、突き飛ばしてままの形で動かなくて。どんどん短い間隔で泣き始めた私に、掠れた声で「夜」と呼んで。

チエダーさんもスワイーツさんも固まつて私達二人を見ていて、飼い主さんがゆっくり近づいた瞬間、私は弾かれたかのようにそれこそ脱兎の勢いでその場から逃げたのです。

*

ポーカーフェイスが上手くいかなくて苛々して突然の接触に記憶がフラッショバックして混乱した飼い主さん、兎さんを泣かす、の巻。

8・兎ですから、寂しいのは駄目なのです（後書き）

オマケ・スウェーツ君が病んでた理由

・咲ちゃんと夜がイチャイチャしてた頃、何故か討伐対象の火竜が登場。この時、スウェーツ君は道祖神様に石を投げたからだと泣きました。

・当然起きたチェスターさんと一緒に上位ハンター二名で下位モンスターを狩ります。この時猫は岩の陰で震えていました。

・チェスターさんに良い所を見せたいスウェーツ君。頑張つて斬り込んで斬り込んで斬り込みます。

・尻尾も切り落とし、肩とか頭とか派手に斬りかかっていたら、チエダーさんが撃つた弾が火竜の（すでに一三発撃たれた）眉間にごつん。弾間違えて爆発。

頭が吹っ飛ぶシーンに、モロに見てしまつた二人と一匹は固まりました。

・とりあえず最低な勝ち方をした一人ですが、スウェーツ君はこのトラウマになりそうな光景に道祖神様に石を（ゝゝ

・そしたら今度は何故かドスジャギイが仲間と一緒にやつて来ました。

今度こそ良い所を見せようとしたら火竜の脳味噌踏んづけて派手に転ぶという……ジャギイに連れ去られる猫を見てるだけの自分、散らばる火竜の脳味噌、颯爽と格好良く自分を助けるチェスター、道祖

神様にい s (r y) の諸々の理由で自信喪失意氣消沈、とにかくズブズブに沈んでしまったスウェーツ君。

信心深いスウェーツ君はメンタルが非常に弱いのです。

9・新しい環境にはなかなか慣れません（前書き）

兎ちゃんが始めたお話をです。「注意ください。」

9・新しい環境にはなかなか慣れません

「へ、ひ、う わやんつ」

ぐしゃぐしゃの顔で適当に走っていたら躓いて派手に転んでしました。

そしたら膝が痛くて、手が痛くて、頭が痛くて、心臓が痛くてとにかく全身が痛いことにせつと気が付いたのです。

今は月が隠れていって、星明りでは傷の程度も分からず…私は近くの木に身体を寄せて、夜の暗闇に怯えて震えるぐらしさ出来ませんでした。

(…飼い主さんの為に…、あんなこと、なにこ、私は空回りしてぱっかり…つ…)

精をつけでもらおうと魚を獲つたら、それを捌く飼い主さんはとても寒しう。喜んでくれるかなと思つて渡した鉱石は、受け取つてもらえなくて。……喉が渴いたのだろうと思つてお茶を渡したら、気分を悪くさせてしまった。

（『ありがとひ』って、…ひづ。ただ撫でてくれるだけでも良か

（こんなつもつじや、無かったのに。）

つた。感謝されたかつた…必要とされたかつた…）

飼い主さんが慌てて迎えに来てもうひとつからずつと、…ずつと。あの雨の中、たつた一人きりの生活に戻るんじゃないかつて怯えた時から 何でもいい、どんな事でもいいから、飼い主さんの役に立ちたかったの。

こんな私の面倒を見てくれる飼い主さんに、報いたかつただけなのだから、嫌はないで。突き離さないで。

もう隣がいいなんて思わないから、煩わしいのだつたら隅でひつそりとしているから。せめて飼い主さんの世界の端で、生きさせて欲しい。

（……『めんなさい』、したら、許してくれますかね……？）

多分、でも、会いに行き辛い。ひとまず飼い主さんの所に行かないで、チエダーさんの所に……いえ、それは迷惑ですよね…。

チエダーさんとスウェーツさんが私に良くしてくれるのは、ただ飼い主さんが頼んだからですもの。逃げ出した先で庇ってくれる間柄では無いでしょう。

（会いたいのに会いたくない、なんて…面倒臭い）

兎の頃は、そんな複雑な感情、知らなかつた。

会いたいから会いに行く。ただそれだけの思考回路。

なの

に。飼い主さんの言つ通り、「人間」は面倒臭い。

そんなぐちやぐちやな中、はつきりしてるのは「帰りたい」という感情だけです。

でもやつぱり「何処に」帰りたいのか分からぬ。「凍土」に?それとも飼い主さんのお家?それとも……。

「ああもうツッ……」

ぐしゃぐしゃもやもやとした思いを吐きだそうと、私は無意識に身体を寄せている木を殴りつけ……そう、初めて物に当たつてしましました。

飼い主さんは物を大事にする人だから、当たってはいけないと教わつていて……教わつて、いたのに。……破つてしまつた。

殴られた個所は陥没していて、私の手は余計に血が出てて。とても痛かったけど、これは飼い主さんの言いつけを破つた罰だと思つのです。

(…水で洗わないと、危ないって飼い主さんが……でも、動きたくない…)

またも面倒な思考に入りそうになつて、私はそれ以上考えるのをやめて、直感で動きました。

とにかくしても、今は寝てしまおう。

(もう少し寝心地が良い所を、探しまぁよ。)

*

「お嬢さん、お嬢さん」

「…………ん、う……？」

「お嬢さん、何故こんな所で眠っているんだい？」

「…………」

気持ちは悪い。

田の前のお嬢さんの質問に応えたいのに、気持ち悪くて口が開かないです。

「しゃべれないのかな？」

「…………」

その質問にふるふると頭を横に振って、何度も躊躇つてから、声を

田中つと　田中つと　…？

「…………え？」

「お嬢さん？」

「あ……っ、……」

話が、出ない。

田中つとあると息に混じった音になり、田中しきつた後は喉が痛くて、私はその現実にぼりぼりと涙が零れてしまつて。

お爺さんが困つてゐる雰囲気が分かるのに、謝る事も出来ないのです。

「……お嬢さん、何日前に此処に来られたのかな？ほれ、この棒で書いてくれぬか？」

「……」

「……やうか……」

あのは、お嬢さん

「もう、一週間も経つてゐるんだよ」と、静かな声が教えてくれたのです。

もつと言えば、私が寝床だと思っていた所はドボ…ど、びざるぐるく…とかいうモンスターの尻尾だつたようで、のんびり歩くモンスターとその尻尾で死んだように眠つていた私を見つけたお爺さんは、

尻尾から落ちてしまった私を見て、慌てて飛んで来てくれたのだと
か。

それだけでも絶句モノなのに、お爺さんは思わず氣を失つてしまつ
程の事実を、教えてくれたのです。

「それで、お嬢ちゃんが今いる此処は、『密林』なんだ」

みつりん、つて、どこですか？

*

雪が所々残る、少し懐かしさを感じる村、ポツケ村の端の端で、私はお爺さんの手伝いをしながら過へることになりました。

防具から温かくてもふもふして可愛い服に変えて、お薬を作つたり
お店の番をする事が私のお仕事です。
あれからもう、一月は経つたのでしょうか……。

(もう嫌だ…… 飼い主さんの所に帰りたい……)

あそこには雪なんて無かつた。こんなに寒くも無かつた。知らない人と一対一で接したことすら無かつた。少しだけ閉塞感のあるこんな村なんて大つ嫌い。もう嫌、帰りたい……。

(もうかく住まわせてもらつてゐるの…… 悪い子になつてしましましたね、私……)

でも、でもしようがないじゃないですか。お爺さんは優しいけれど、お婆さんがとても怖くて。お嬢さんには事ある」と、「大つ嫌い」と（初めて面と向かつて言われました）言われ続け。

店の売り上げが良くなつたから此処に置かせてもらえたけれど、何の足しにもならなかつたら何処かに捨てられる環境の中で、私は何度も、子供のように笑つていられた昔の日々を想うのです。

飼い主さんの言ひ「馬鹿」とお嬢さんの言ひ「馬鹿」の寒暖差とか、私に色々持つて来てくれる人達の声の優しさと、ほんの時々にしか聞けない、飼い主さんの優しい声の違いとか。…… 色んなものの違いを感じる度に、飼い主さんに抱きつきたくてたまらない衝動に駆られるのです。

だけど恋しいと思ひ姿を見せると誰かに咎められてしまつから

私はいつしか本当に、声が出なくなつてしまつて。

住み慣れた凍土よりも寒い世界で、あの時の行動を恨むくらいしか出来ない。

(……あ、お客さんだ)

「 、 ?

ただでさえ嫌いなこの世界で、私がどうしても好きにならうと思えない理由の一つにあがるのですが 私はこの村の言葉が分からぬいのです。

名前程度しか分からぬいし、言葉を教わるうにも「生意氣」とか「そんな暇があつたら働け」とお婆さんとお嬢さんに言われ、お爺さんは仕入れの仕事が忙しくて教えてくれません…。

仕事に差し障りがあるので、商品の名前は教えてもらつたのですけど……まあ基本的にはお嬢さんがお客さんの相手を買って出てくれるので、私は黙つてお店の（何故か奥ではなくて人から見える所で）商品に囲まれながら、黙々と薬草を磨り潰し続けます。

ですがお客さんはまず最初に私に声をかけます。そして私は言われた通り、意味が分からぬいながらに微笑むのです。

この前、私に優しくしてくれる（扱つてる商品故か言葉が大体分かる）離れの店の女店主さんが「こんな何も分かつていぬ娘に厭らしい商売をさせて…」とお婆さんの胸倉を掴んで怒鳴っていたので、あまりよろしくない事なのだと思います。

(…厭らしそうで最近よくお嬢さんに言われますけど、どういう意味なのか分からぬのです…)

「てん、と首を傾げていたら、お密さんはお嬢さんとの会話を急に打ち切つて、ニコニコとお薬を注文してきました。頷いてお薬を取りに行こうとしたらお嬢さんに小突かれて転びそうになつたけれど、何事も無かつたかのような笑顔で、お薬を渡します。

素早く、相手の手が触れない内に薬を渡すと、隣でお嬢さんがお金を受け取りました。そしてまた見えないよう尼小突かれたので、私はそそくせと持ち場に戻るのです。

「 、！」

「ひちおいでと手を招かれますが、私は変わらず微笑んでペニンと頭を下げました。

相手はそれでも何かを言つてきましたが、お嬢さんに迫られて渋々何処かに去つていきます。

(……飼い主さんは、こんな私を見たら、どう思われるのでしょうか…)

別に嬉しくも無いのに笑つて、小突かれても平氣そうな顔で笑つて、何も言わぬ、心の中で泣き」と言い続けて。

軽蔑されるのでしょうか。可哀想だと黙ってくれるのでしょうか。自業自得と、見向をもたれなこのじょうつか……。

(私の中には飼い主さんしかいないの)。飼い主さんの中に、私は……)

思わず俯いていたら、伸びた髪が煩わしくて。暗い気持ちのまま、髪を一房、ほんやりと弄つてみました。

元々狩りに行く前から伸び始めていたのですが、この一円で肩を少し越す程度に伸びた黒髪を、私は切る事が出来ずにいました。

だつてこつも、この髪を切ってくれていたのは飼い主さんなのです。恐る恐る切つてくれていたあの手じゃなきや、嫌なのです。

(もつ…あの髪飾り、付けられても出来なこのかな…)

そつ思ひと苗じくじ苦じくして、お嬢さんにまた小突かれるまで、私は静かに泣いたのです。

*

こんな想いをするなら、あの時あの場で泣いてしまえば良かつたんだ。
⋮と後悔中の兎ちゃん

9・新しい環境にはなかなか慣れません（後書き）

ポツケ村の住人を「冷たい人達」みたいにしてしまってすいません。

ユクモ村は何となく他所の人間に優しそうなイメージがあるのですが（見た目が華やか？なせいかもしませんね）ポツケ村は店も少ないし雪が残つていて人寂しいせいか、とても閉塞的な村に見えたので……。

勿論、そんな閉塞感漂う中でも咲ちゃんの代わりに夜の扱いに怒ってくれた女店主もいるし、他所者に優しい人だっています。笑つてるけど笑つてない夜ちゃんを、下心無しで励まそうと思つた男性客もいたかもしません。

それでもやっぱり、夜ちゃんにとつてはどうでもよくて、冷たい村なのには変わりないので。

10・弱りやすいのや、注意ください

「…………やつぱり俺の膝を枕にするのか」

「……黒。男の膝枕なんて嬉しくないだろ」
「いいえー？」

「まったく……まだ家計簿終わらないから、先寝てていいんだぞ」

「眠くないですもん」

「……やつき寝てただろ」

「だって飼い主さんの膝枕、落ち着くのです……」

「落ち着くな」

「うー……」

「はあ……」

「ふふつ飼い主さん、くすぐつたいですー」

「…………」

「んーん」

「…………家計簿が終わらない……」

「え？」

「いや」

「…………？」

「…………ホットミルク飲むか？」

「蜂蜜！蜂蜜！」

「腐るほどあるが、今は駄目だ」

「…………」

「肉汁入れるぞ」

「…………私、飲みません」

「ん」

「えへへー」

「あつたく……」

1

- 1 -

「私も飲みます」

「ああ、じきあ逃げ。今淹れ上

「 飯い主さんの いたたき 热い：（・・・・）」
「 欲み立かつてら令ましてろ。 ブラソアツトずれてるぞ

「おうつぶー」

卷之三

「はふはふ」

」
.....
」

「はふふふふ」

「…お前はどんだけ猫舌なんだ。温くしといたんだぞ」

「え？」

「……あ、「

溫
書

「今田は猫舌なんですか？」

「ああ、そうだな」

「飼い主さん、そんな乱暴に書くと破れてしましますよー...はふー」

1

「そろそろいいですかね…」

「……美味いか？」

ん
あれ、甘い？

「…………」

これ
蜂蜜がでるので、かまへ食い主さんだけでもういて

卷之三

「……もう二度。……あんまり飲み廻るんなよ」

「 もう少ししなさいーーー」の棒つきが……

「 ドン、と。……暖炉の灰を搔き出していたら、背中を強く蹴られました。

その衝撃で手が少し火傷してしまいましたが、私は何も言わずに頭を下げました。……だって、最近のお嬢さんはとても暴力的なのです……。

唯一の味方であるお爺さんはやつぱりお仕事でいなくて、お婆さんはのんびりとお茶を飲むだけで、此方を見もしませんでした。

（最近……打撲の跡が消えないのですが……）

まあ、ゆつたりした服からは見えないらしいかな、とは思つのですけどね。

*

今日は快晴。だけどとも冷たい日。

何かしないと手が冷えて痛いのですが、今日はお薬を作らずに黙つてお店の番をしなくてはいけません。

ひび割れが出来た手に息を吐きかけながら、それでも心は温かかったのです。

忙しいお爺さんが、他所者の私の為にお金を払つてギルドを含め各所に私の情報を出してくれると、コクモ村に行けないお爺さんの代わりに、強いハンターさんにクエストとして頼むとも言つてくれたのです。

最初に連れて来られた頃にギルドに連絡を入れてくれたらしきのですが、モンスターの被害が多くて後回しにされていたようだ、最近やっとその被害が落ち着いたらしきので、本格的に頼む、との事です。

(…もうどんな風に思われてもいい。飼い主さんにもう一度会いたいのです……)

この村に居たくないとかよりも強く、飼い主さんにただ会いたい。

一緒に住みたくないといつになら住みません。視界に入れたくない
といつのなら田の前から消えましょう。……だけど、たつた一度で
いいから飼い主さんに会って、お礼を言いたい。

この村に来て、やつと分かつたのです。私は本当に恵まれた生活を
送っていて、飼い主さんに守られていたのだと。飼い主さんはぶつ
きらぼうで時々怖いけど、本当に本当に優しくて、私を大事にして
くれてたのだと。

(何とかして、飼い主さんに『ありがとう』って、お礼が言いたい
のです……)

そしてもし許してくれるなら、不自由な私の気持ちを聞いて欲しい。

食事も、会話も、何もかも。飼い主さんがいないと味気なく
て、寂しくて、悲しい。

いつもいつも飼い主さんの事ばかり想つて、飼い主さんが名前を呼
んでくれるだけで幸せで。飼い主さんに触れられないだけで、死ん
てしまいそうなのだと。

飼い主さんを想うと幸せで、辛くて苦しい。この感情を何と言えば
いいのか分からぬけれど。たつた一つだけ、分かつているのです。

(飼い主さんの隣に、話させてください)

束の間でも、良いですか。

「 そここの美少女さああんー」口づけ向いてーー。」

「？」

思わずポロリと涙が零れそうになつて、手を祈りの形に組もうとした矢先の事でした。

大変元気な男性が、がつしゃがつしゃと鎧を軋ませながら私の所へと手を大きく振りながら駆けてくるのです。

(あれ、この前來てくれた人、ハンターさんだつたんだ…)

お店のお客様が見える所で黙々と薬草を磨り潰していた私に、お薬を買いに来てくれた人。何度も来てはこつちにおいてと手を招いていて。

(……？何で言葉が分かるのでしょうか…？)

今まで此処の地方の言葉で話しておられたのに…。

「いやー良かつたー今日はあのお嬢さんいないんだねーいつつも此処に来ると邪魔してくるからさあ…」

内心怯えている私に気付かず、男の人は語尾を潜めて「まったく迷惑さ」と言い捨てました。

その声がとても冷えていたので、私はびくりと震えて 気付いた男の人は二かつと笑つて自己紹介してくれました。

「俺、ユクモ村生まれのハンターで、豊受トヨウセつて言うんだ。食い物の神様からとつてるんだぞー？」

「……」

「手頃で高額のクエストがこの村に結構あつたからさ、狩つて狩つて狩りまくつてたのよ。そしたら村の知り合いがさ、めつさ美人な女の子が居るって言うから…可愛過ぎて通つちゃつた 婚約者は内緒にしてね！」

俺は婚約者一筋、女の子は大好きだけど手は出さない紳士だからね！安心してくれたまえ、…と高らかに告げるのを、私はただ黙つて聞いていました。いえ、黙る事しか出来なかつたのです。

(ユクモ村出身……！)

じゃあ、もしかしたら。

「 最初はね、ただ単に口のきけない子としか知らなかつたら、ここいらの人間だと思つてずっとこいつの言葉で話しかけてたのよー」

「……」

「んでんで、この前、『咲』っていうハンターから君みたいな子を知らないかつて手紙が来てね？ギルドにも届けを出してるみたいなんだけど、埒が明かなかつたから知り合い全員に送つたみたいな

よ」

「……！」

「読んだらばっちし君じやん？でも人違いかなーと思つてしまふく君に言い寄つてみたんだけど、お嬢さんが異様に邪魔してきたもん

だからや、ビンゴかなあと……」ついて隙を狙つて会こに来たわけ

「…………」

「え、ちよ、泣かないでっ。俺、女子子に泣かれると……」

「…………」

「う、うめさんね　えーっと、『夜』ナリヤん?」

久し振りに聞いた私の名前に、涙を拭きながら大きく一回、頷きます。

すると豊坂さんは「っしゃあーー」と力強く手を握り締めると、ぽんぽんと軽く肩を叩きました。

「……咲、ずっと君を探してたんだよ。見つけられないあまりにかなり荒れたらしくてさ、狩り場で無双し過ぎたせいでしょうく謹慎されたぐらい毎日君のこと心配してたんだ。いやー、見つかって良かった良かった!」

「…………」

(心配してた　じゃ、じゃあ、私の事、嫌つてない……?)

豊坂さんは私を泣かせるのが得意なのでしょうか?

「探してた」「見つかって良かった」の言葉がナイフのようずっと耐えてきた心に突き刺さつて、涙が勢いよく溢れだして止まらなくてしうがないのです……。

(飼い主、さん……!)

私、私の事、忘れないでいてくれたのですね。心配してしてくれたのですね！

「……さあ、もう泣き止んで。今すぐこの店を出るんだ。ギルドに保護の依頼をしないと。あと咲にも連絡しないとね」

「……？」

「…………」この家の人に聞かは、君を逃がさない氣だ

念の為にも法^{ギルド}で守られた場所に居た方が良い、と急に真剣な目で言う豊受さんに、私は訳が分からなくて。

きょとんとした私に苦笑すると、豊受さんは低い声で、先程の冷たさを残す孕んだ声で、教えてくれました。

「君は金になるからね」

「！」

「小突かれようが…手がこんなになつても、君には何処にも行く術がない。大人しくて『良い子』な君は、住まわせてもらつていると、いつ負い目から頑張つて働くだらう」

「…………」

「もつと言えば　君は言つなれば招き猫さ。何人か俺みたいな馬鹿な男を口がな通わせるぐらいは簡単だらうし」

「…………」

「だからこの店の人間……あの人の良さそうな爺さんはね、君が行方不明の人間だなんてギルドにも村の人間にも伝えていない。近くの村の口のきけない親戚を預かったんだ、って周囲に言つてるんだ。

それにやつを確認したら、君を探す依頼を金で消そうとしたよ

「……え……」

待って、ください。

私は自分がどう風に扱われていたのかは分かっていましたが、あの、私の味方だと思っていたお爺さんが？
お嬢さんやお婆さんから庇ってくれて、お爺さんがいる時は虚められなかつたのに……？

「……今までずっと、君が陰で虚められてるのを見て連れ出してやりたかったんだけど　君の証言とその怪我が無いと、こっちも動けないからさ。でも君が『行方不明のハンター』なら、それを知つた俺には君を保護する義務があるから、少しの無理も大丈夫」

だから、ここから出でくれ。真剣な目で、飼い主さんと似た大きな手が差し出されて　私は、豊受さんのその姿に、飼い主さんを重ねました。

お爺さんがそんな事をする筈が無い、と豊受さんを危険視する声に、「飼い主さんの事を知っていた」「ギルドに行くのだから、それで真実が分かる筈」と説き伏せて、そつとその手をとりました。

……結局私は、飼い主さんを連想させるモノに弱く、信じてしまうのです。

「了承、つて事でいいのかな？」

「……」

「じゃあ、…あ、何か持つて行きたい物とかある?」

「……」

「そつか。じゃあ行け!」

「かつと笑う豊受さん」、私も釣られて弱弱しく微笑んで。

冷たい風を防ぐ」と服の合わせを掴んだ時でした ちょうど

ガラリと奥の扉が開いて、荷物を持ったお婆さんが出てきたのは。

「……何を、しどん……ー?」

「……つ……」

ギッヒ、視線だけで射殺せそうな程に強く睨みつけるお婆さん、「私はビクリと身が竦んでしまいました。

パニックが起きそうになつて視界がふらふらとして、とにかくビックリよりも何の反応も返せない私を庇つよつ、豊受さんはお婆さんの前に立つてくれました。

「後で通知しようと思つたんですが、丁度いい。彼女 夜を、連れ帰させていただきます」

「ああ、んー?」

「知つているでしようが、彼女はギルドから捜索依頼が出されている行方不明中のハンターで」

「そげなこと知るかい!! わたしたちの棒をひつひつ返して!! まだ仕事が残つとろがッ」

「……自分も同職の身として、彼女を保護する義務がありま

「どうせ嘘言つて売りつける気なんだろッ 犯罪者が…! その小汚い

顔を一度と見せるな…」

「……」

ばしゃあつと近くの水が入った桶を豊受さんごぶつかけ、お婆さんは商品を乱暴に落として私に手を伸ばします。

「口口口と此方に転がる桶を蹴飛ばして、鬼のような形相で迫るお婆さんに私が息を飲んで身体を固くすると、驚掴みにしようと伸ばした手は届く事はなく 黙つて水を受けた豊受さんがその手を掴んで止めました。

「放し…！」

「……」

「ハンターが村人にこげな」として許されると思つんか！？」

「……」

今だけ、この人よりも良い耳が嫌になります お婆さんの声がより怖くて、つるむなくて、耳から脳を刺すかのように突いて聞こえるのですから。

(……豊受さん…)のまじや、風邪を引いてしまってます…)

私の目の前でぼたぼたと水滴を落とす豊受さん。せりはりと見守っていると、豊受さんは唾を飛ばしながら吠えるお婆さんの腕をぐり曲げて、静かに口を開きました。

「……婆、よくもまあこのクソ寒いってーのに水かけてくれたな」

「あ、あ！？」

「ぶん殴りでーが… テメーの言つ通りこいつら村人に危害を加えると面倒だからな」

すつと腕を放して、鼻を荒く鳴らすお婆さんに冷たく一警すると、豊受さんはさつさと私の目の前から去ってしまいます。

(え
！？)

目の前で邪魔をしてくれた豊受さんが消えて、私はようやくお婆さんに強く抱まれて。

血走った眼が私に近づき、私が暴力よりも嫌いな、聴覚を痛めつける為に耳元で喚こうと口を開き 私が涙目をきつく閉じ、痛みに耐えるよつこと身構えた瞬間、「ゴシ」と嫌な音が。

「……？」

恐る恐る目を開けたら涙が一筋零れて、何度も瞬いて見たのは、

(…………あれ？)

「 豚みてえな顔だからな、特に氣にもなんねーだろ」

もう一度、お婆さんの顔に直下して、ぐるぐると転がる桶。倒れて呻く、顔が赤いお婆さん。

蹴り飛ばした足をトントンと軽く叩いて、豊受さんは少しスッキリ

したお顔で言いました。

「突然の突風、……はキツイか。食中毒つて事にして……顔は転んだ時 怪我つてことにするか…」

「？」

ぶつぶつと呟いた後、チョダーさんのようにニヤニヤと笑いながら、 豊受さんはポーチから桃色の美味しそうな水が入った瓶を一つと、 透明な水の入った瓶を出しました。

「……、……」

「ん？ 大丈夫大丈夫。死なないから」

「…」

そういう問題なのですか…？

豊受さんがお婆さんの口に零れないように透明な水を飲ませると、 急にお婆さんは小さく唸つて、私はオロオロとしてて。

豊受さんは一時間後が地獄だぜ、と低く笑うので、とんとんと肩を 叩いて首を傾げました。

「IJの薬はな、強制的に吐かせるんだ。しかも使つてもバレにくい 便利な薬でねー。結構長いことこれが続くから、俺らの事を気にし てらんねーよ」

そう言つてお店の中に入り、捨てようとしてそのままにされていた 腐りかけの林檎を齧つて暖炉に吐き捨て、もう一度外に出てお婆さ

んを僕のよつに抱いて適当に捨てました。（その際に椅子などもぐちやぐちやにしていました）

お婆さんの近くに林檎を転がして、豊受さんはジャムが並ぶ棚の一一番目がいく所に桃色の美味しいそうな水が入った瓶を紛れさせ、周囲のジャムには別の透明な水の入った瓶の恐ろしい中身を少しづつ入れます。

「うひし、とりあえずこれで仕返し第一段階終了」、つと

「う……」「う……」

「ん？ 大丈夫、どっちも死ぬようなものじゃないから

「…………」

「夜ちゃんの給料を取るにも流石に窃盗扱いになるしなー……」

「…………」

「どうしようかなー……

「…………」「…………」

「…………ん？……え、ちよ、何で泣いてるのー！？」

（……私、これで自由になつたんだ）

そつ思つと、そつきから涙腺の緩いこの日からは、ぼたぼたと涙が落ちてしまうのです。

（……もへ、怖くないんだ）

今までずっと、平氣そうに沈黙を保っていたけれど、本当は死んでしまった。そつだつた。

暴力をふるうお嬢さんも怖いけど、それよりも本能的に身が竦んでしまう程の咆哮のような怒声を吐くお婆さんが一番怖くて。この人

の怒鳴り声でしゃべれなくなつたと言つても「いいくらい」、この人を恐れきたから、……今、凄く安心してしまつのです。

豊受さんはそんな私の心情に気付いてくれたのか、黙つて私の身体を抱き寄せて、頭を優しく撫でてくれました。

「これでもう、咲の所に帰れるから」

*

兎ちゃん虚めは「これにて終了」です。（多分）

10・弱りやすいので、『注意ください』（後書き）

オマケ（キャラクター紹介）

* 豊受
トヨウケ

第三話に登場して婚約者にホモの噂を流されたハンターさんです。捨て子で食べ物に困っていた養父が食べ物の神様の所に祈りに行つた先で拾われ、食つに困らない人生でありますよつて、という祈りを込めて、この名前を付けられました。

貧乏なのに拾つてちゃんと育ててくれた養父の恩返しの為に、現在ハンターとして高額クエストを受けては養父に仕送りをしてる毎日です。

ちなみに咲ちゃんとは幼馴染なので第三話ではすつゞく情けない素を出しています。

昔は殴り合いの喧嘩をしたりモンスターの巣に爆竹放り投げたりそれがバレて村長に仲良くボコ殴りにされたりと、生傷の絶えない日々を一緒に過ごしてました。

もつ田さんこと思つていたキャラなので、口調がおかしいのは許して下さい。一応女の子の前と男の子の前では性格が違うところ設定……を後付けました、すいません。

ちなみに咲ちゃんの手紙の内容ですが、今回の事情（喧嘩は伏せてます）と夜ちゃんの容姿、報酬金額（高いです）、「分かってるだろ」けど、夜には絶対何があつても手を出さない、もし誰かに傷つけられたようなら、俺が付くまで、『よろしく』な?」という内容が書かれていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9129z/>

雪の中からこにちは、飼い主さん！

2012年1月10日18時53分発行